なじみになつた畫僧慈仙が、今客分になつてゐる四條寺町下ル大雲院へ身を躲しつゝ、十五日の夜舟に下坂して、又もや篠崎家へ駈け込んだ。

三島父子を中心に、その門人武内西左衞門（確齋）・廣瀨重兵衞（筑梁）等を始め、春田仁左衞門（横塘）等も顏をそろへて、善後策に取掛つたが、廣島藏屋敷の中背頭田中藤三郎も同座して、

とも角、國元殿樣まで御承知なされい事にて、年限なしの滯留に御座いへば、その養父同樣の人より、差圖之れあり、京都門人引立ての爲め、久太郎、名代として差遣はしいなどの旨、表面書狀を彌太郎樣（春水）へ遣はされ、それを役人へ彌太郎樣より、內屆相すみいて、たとへ出立の跡になりいても、萬事明白に相成り申すべくい。

との强硬論を主張する。中には「菅久太郎」と苗字さへ變へて置けば、一層安全だといふ說も出て、結局「羅井久太郎」と名乘ることにした。

その顚末を茶山に報告した內に、

金山（重左衞門）は、とかく先年入京の時の樣に存じ、疑ひ申す鹽梅にて、右世話致しい元瑞へも、彼男には御困りなさるべく察し奉る。此方も先年は大に困り果ていなど、

手紙に申越しい由。

と、それは內情を知らぬ上からは、致し方もなかつた。何はあれ、一時滯坂の上、その雲行きを見定むべくあつた。

これに關して、春水より四月廿七日、金山への手紙には、

其儀相濟み申さずいへば、私の首尾にもかゝり申すべくい段御考へにつき、早く京借宅引拂ひ、下坂の由、早速篠崎手寄にて、串田彌助（定賴・本藩京坂兩邸の留守居）方へ聞え、彌助より菅先生へ承合はせい所、私、用事之れあり、且其身、病身につき、養生かたゞ〳〵差上せいとの返事仕りいにつき、彌助より表札無しにて然るべく、其の內には又模樣もつき申すべくと申遣はしい由。

篠崎には其段察しい事に見え、此節は（山陽）鳥渡と此元へ御下りなどゝ申越いて、串田へは篠崎より、人を以て申越しい儀と相見え申い。

篠崎家假寓の間には、美濃上有知の庄屋村瀨平次郎（藤城—廿一歲）が、梅花社の詩會へ來て、そのまゝ山陽最初の門人となつた。

その際、京坂遊學の爲め、生玉蓮池の持明院に寄寓してゐる田能村竹田（卅五歲—身分は

岡藩學問所由學館副頭取）からの手紙で、始めて訪問してみると、その要件は想像もしてゐなかつた支那小說・霍小玉傳の原文に讀評をものした『風竹簾前讀』といふむつかしい標題の稿本を見せて、その題詩を得て出版したいとの話であつた。元來竹田は南畫專門と思ひきや、かゝる方面にさへ深い趣味を寄せてゐたのがうれしく、やがて一詩を題した。

三尺の烏絲、幾斷腸。　海山の消息、兩つながら茫々たり。
風簾、竹動いて、人の到るなし。　恨殺す、題詩の李十郎。

竹田は、早速その淨寫を求め、大原東野の畫とともに、その卷頭を飾つた。

唐朝の詩人李益（十郎）は、帝室霍郡王の庶女小玉（ちうぎよく）に、その竹の詩が慕はしく、一目逢ひたさの思ひのうち、ふとその人が門內に現はれた。その時、一むら竹に吹きかよふ風のそよぎがしのばれた。そのまゝふたりは、とばりの奧ふかく、十郎に烏絲（くろいと）の欄を織り込んだ絹へ誓詞を書かせて、末の契りを言ひ交はしたが、その後、いつまで待つても消息は絕え、女史はいつも風竹の音に昔をしのんでゐた。

四月三日に手紙を出して、先日の來る五日、改めて御來訪をとの約束を、六日にしていただければ、幸ひその日に梅花社の詩會がありますから、三島先生もよろこばれ、上坂した武

元登々庵へも案內を出されましたからと言ひ送つた。

十四日、茶山より、京坂住居の事、一切差支へなしとの來信に接し、一件は歪みなりに落着して、近々再入京との事を元瑞に通じた。

五月に入つて、もとの春日町に再び塾を開き、廿三日から開講して、一・六は『左傳』、三・八を『文章軌範』と定め、小石塾は、二・七・四・九の日とて、相互に儒學と醫術の書生が、兩塾に集まる日取の都合を圖つた。

『日本外史』の論贊に着手すべく、その參考書として、小竹の家から、『大日本史贊藪』『讀史餘論』などを借り出したのは、ことし冬の事であつた、それで稿本を無贊なりに下し、小竹の手でいくつも寫本を作つた。

文化九年（卅三歲）正月には、春日町より、車屋町・御池上ル西側に轉居して、いよ〳〵私塾の發展を見るに至つた。

二〇、遊　歷（上）

その一、淡路・姬路行

入京以來第一回の遊歷は、浦上玉堂の子、紀一郎（春琴―卅五歳）と同伴、文化九年正月十一日に出立して、淡路へ渡つたのがそれであつた。

翌日、大坂に小竹を訪うて、――その養父三島と同じく、洲本城番稲田家へ出講してゐる――諸方への紹介狀を賴み、十三日、兵庫發船、洲本に着いたのは十四日の未明であつたが、氏神八幡宮の祭日に近く、城下は遊歷客をもてなすほどの餘裕はなかつたが、ともかく紹介狀に物をいはせて、材木問屋大谷屋佐太郎（阿蒿箴太郎）をおとづれた。

二月一日、城代稲田家の三男植美に迎へられ、馬形山の別莊で揮毫した。が、逆に山陽の畫に、春琴が詩を題したのが今に傳へられてゐる。

四日には、學問所教授・那波與藏（網川・五十六歳）を訪ひ、その子辰之助（鶴峯・十七歳）の詩稿添削を賴まれ、茶山は又、遊歷中入用な關防の印を持ち忘れて、それを借り受けたりした。

福良へ廻り、藩の山林奉行藤江石亭を訪ひ、また洲本では學問所の小邨士德とも詩の唱和を試み、やがて歸京の途に就いた。

秋冬の際には、又姫路に遊び、城下俵町の木綿問屋で藩の用達を兼ねる、門人馬場三郎右

衛門（元華）に迎へられ、滯留中には又、紅粉屋又左衛門（宗籌）の八十賀筵に臨み、佐々木利和所藏の太閤禁制札摹本、喜多家（松籟居）・明石家、及び骨董業來樂亭の古書畫を展覽した外、吉福村の醫八木家の棕亭を訪ひ、山田村の井田泥齋宅にては烏帽子石を玩び、いづれも記文を作り、更に往復とも、加古川の中谷環齋宅に立ち寄つた。

その二、尾張・美濃・參河・伊勢行

第三回の尾・濃・參・勢に跨がる遊歷は、前二回に比べて、大がゝりのものであつた。

このたびの同伴者は、同じく春琴と、土佐派の宮脇有景を加へて三人であつた。有景は、文化五年十一月に、京都から來て、たび〳〵春水を廣島に訪ひ、そのころ春琴も春水を訪問して、山陽もその時に知り合ひとなつた。そのころ春水より金山重左衛門への手紙にも「相變らず時々（有景の）來尋に預かりい、繪も上達と見え申い、平家を少し語り申されい故、をもしろくい」と書いてゐる。

文化十年（卅四歳）十月九日、その出立に臨んで、山陽は煎茶の指南を受けてゐた苕華宗匠の送別會に臨み、松村月溪も來會した。大津にては河村庄助（楚寶）の家に一泊、摩針峠を經て、美濃に入り、關ヶ原から赤坂の德川家康陣屋跡を見て、岐阜・大垣から美濃に向ひ、

上有知・郡上・八幡に遊び、藍川から大垣方面に引返し、尾張に入りて清洲・名古屋から、参河西尾へ廻り、又々大垣へ向ひ、それより木曾川を桑名へ下り、四日市から伊勢路を取つて歸京したのは、十一月廿二日であつた。

このたびの遊歴は、村瀬藤城と、名古屋の醫小林亮適（香雪）のすゝめであつた。藤城とはすでに師弟の間柄で、香雪は、山陽社中（笑ひ會）の客員として、いつも入京してゐた。香雪は、日本最古の金石文―山城宇治橋の斷碑を修復して、その名を知られてゐた。

赤坂では、矢橋赤水（翠微亭）を訪ひ、名古屋は宮町の香雪宅を本據として久しく滯在し、其の間、秦鼎（滄浪）を訪ひ、上有知方面は藤城が專ら案内役をつとめ、善應寺の禪智和尚（晦巖）を訪うて、その珍藏してゐる文房の名品を賞玩して、端溪の古硯・程君房の古墨に心を動かし、西部金兵衛（萬年）とは詩の唱和を試み、久瀨川にては菱田清次（毅齋）を訪うたが、その門人後藤俊藏（松陰・十七歳）は、後に轉じて京都の塾へ入門することゝなつた。

清洲では、天正以來の舊家・早川清太夫（藤陰）を訪ひ、西尾では藩の用達深谷靚翁に招かれ、京都畫家合作十二支の圖に詩を題し、また「又深居の記」を留めたが、主人は後にそ

れを複刻して世に傳へた。

大垣では、藤江の蘭方醫として、兼ねて漢學者の江馬春齡（蘭齋）を訪うて、その長女裏子（細香・廿七歳）に逢ひ、初對面の印象として、「淡粧素服、風韻清秀」といひ、屏風一双に風竹を畫いたのを見、自身は山水畫幅を留め、最後に、別れを告げた時にも、留別として、自畫の扇子を贈り、一詩を題した。

丹青、一夜、羅幃に醉ふ。　却つて千峯に向つて、客衣を振る。
紅樹・翠巒、みな畫本。　佳處に逢ふごとに、崔徽を憶ふ。

「崔徽」は唐の佳人（元稹もその情操に感じて詩を作つた）、裴敬中が、都に歸るのを悲しみ、繪姿を贈つたといふ故事。また、「別れに臨み、細香女史に寄す。細香、雪に阻てられて、また相送る能はずといふ」と、卽吟の一首、

宿雪漫々として、謝家を隔つ。　離情、叙せんと欲するも、路程賒なり。
重ねて、道薀に逢ふ、何の處をか期せん。　洛水の春風、柳花を起すとき。

「道薀」は、晉の名將謝安の從女、雪ふる日、安、「この雪は何に似てゐるか。」その甥の朗が、「空中に鹽をまくが如し。」そんな平凡なことをといはんばかりに、道薀は、「柳の絮が

風に亂れるに似たり」といつた。

「今先生のお立ちに、この大雪、せめては舟場まで御見送り申上げたいと存じながら」といふことばを受けて、道薀ならぬ細香女史に別れを惜み、「やがては來る春の鴨川に、柳のわたが風に亂れるころ、上京なさるのを待つてゐますから。」といつた。

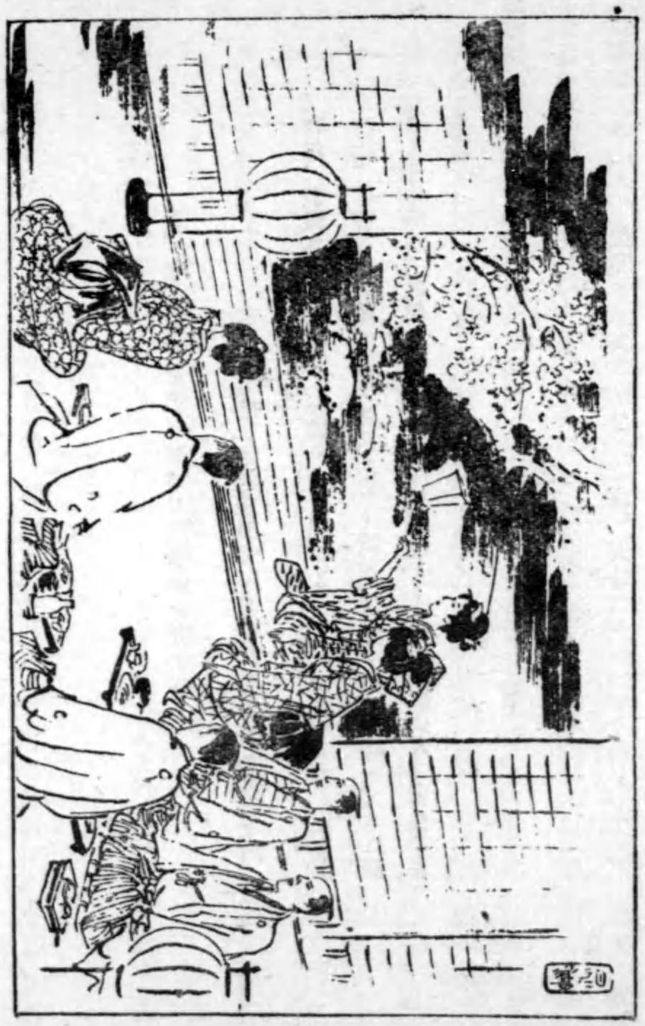
明けて文化十一年の春は彌生の三月五日、女史は山陽の宅をおとづれ、小石元瑞（樫園）夫妻（優子）・浦上春琴・武元登々庵も招かれ、庭ざくらを、ぼんぼりのかげに映して、半夜の歡びをつくした。

その櫻の木は、數日前、塾生林東溪を連れ、程近き八幡さまの夜市を見あるいて、蕾つきのをさがして、二三本買ひ求め、車屋町の宅へ運ばせ、それから毎晩、東溪に宿直させて、手入れを怠らず、丁度いまお客をする日に滿開となつてゐた。

女史はすでに、二日に入京して、山陽と登々庵に伴はれ、嵐山の花見も濟ましてゐたが、四日に改めて案内狀をしたゝめ、女史の旅宿へ持たせてやつた。

一日三秋にい、然ば弊園櫻花盛開仕りい、明日小酌仕りたく、御賁臨下さるべくや。

女史は、その招待に出席して、お客あしらひに出てゐる十八九の娘をながめて、それが主



五、江馬細香女史を招いて觀櫻會を催す圖

文化十一年三月五日（卅五歳・車屋町の宅にて）

昨年、美濃大垣に遊歴して相識り、その門下に入りし女史の入京したるを招き、相客の小石轡園夫妻（月枝女史）・武元登々庵・浦上春琴とゝもに庭ざくらを看る。縁側の少婦は、疋田氏里枝子――後の梨影夫人。（圖は鶴下桑湖氏筆）

人の內緣の妻・りえ子（梨影）と知つたか、何うか。

山陽は去年の冬、幾度も女史の家をたづね、女史はその時早く門人として、師弟の緣は結んでゐたが、山陽はそれ以上に女史に對し、新家庭を造る事を空想してゐた。十一月十三日、名古屋から小石轡園へ送つた手紙に、「一奇事」を急報するとて、

此度の得物、（周の文王が太公望に於ける如く）「熊に非ず、羆に非ず」、謂はゆる「覇王の佐」（輔佐）と申す樣之れありい。玉に非ず、鳳に非ず、得る所は文人の偶（配偶）なり。これは他にあらず、かの御承知の江馬春齡の娘（細香）也。これは再度立ち寄りい。零心挑むにも及び申さずいへども（司馬直如と文君の故事）、兩情、心目の間に相許す所は的確に御座い。されども、一語の通ずべき間隙は無し。此の人、生涯無偶にて、尼になりとしてくれと云ふ事の由、今廿六七（廿七）也。

女史の緣談は今までにもいろ〳〵あつたが、どれも皆その良人と見立てるほどの才子はなく、生涯獨身で居りますといひ通してゐる。さてその容貌は、

淡粧素服、風韻清秀、大いに歌笛者（妓流）の比にあらずい、才情掬すべき也。其の上、右の通りの清操、誠に子成（山陽自身）に偶すべき者と、再び得がたき樣に存じ申い。

「淡粧素服」は、芬々たる梅花の形容、「風韻の清秀」なるは當然、歌妓の美には、それが缺けてゐる。梅花をあざむく美人にして、尙且、詩に長じ、畫を善くし、その上に清操を守つてゐる。前述、竹原舟遊の日にも、「淡粧素服、風神超凡」の玉蘊女史を見てゐた、而かも彼女には「清操」といふ香はなかつた。

是れは當地に江馬の門人あり、これへ小林亮適より申入れ、（妻に）囉ひ申すべくと存じいへども、あまり輕率なるも如何。貴家は彼の家と所業相同じく、御存知の事と存じ奉りい。何分御受合人に御立ち下されたくい、賴み込所は、如何致し然るべくや。

これには樫園も一寸思案の首を傾けたであらう。又これより先、入京以來、小竹からいろいろ妻帶の話を持ち出されてゐたが、その手紙に、理想の妻としては、

小說めけども、こゝに一說あり、何分少々文墨の臭味なきものは、儒酸（儒者貧乏）に堪へぬもの也。男の好きと、金のあるとばかりに戀々仕りいて、衣服をしてやると、芝居をみせるとならざれば、吾（琴）悉不調といふ氣味也。

申さば、夫が竹を畫けば、妻は蘭を寫すといふような趣味がなければおもしろくはない。さういふ候補者を物色してもらひたいといふ。そこで今度の話は、打つて附けの緣談となつ

て來た。その事を聞いたなら、小竹は又何と考へたであらうか。

ところでこゝに又別に持ち上つた話は、江州彥根在の三津屋村に、土地の舊家疋田藤右衞門の娘里枝子（十七歲）は、土地の習慣として、京へ行儀見習ひのため、親族の犬崎嘉兵衞（兩家とも屋號械屋）へ預けられてゐる。小石家へは、よく出入りしてゐたらしく、樫園は、その素性も人柄もよく承知して、今、山陽の配偶者として、それへ目をつけ、自身が假親となり、大垣の話よりも、この娘をと勸めたであらう。

それで、去年の暮に歸京して、ことし春早々、梨影が早くすでに內緣として、賴家に來てゐた。

樫園にしても（おなじく小竹にしても）、夫妻文墨の同趣味といふ事には贊成が出來ないではないかと思ふ。山陽は現にその生活上、餓一錢も國元から助成金は受けてゐない。舌耕と筆耕とが、今その收入の全部に近く、夫婦蘭竹の合作では、何うして生活が保たれよう。たとへば梁川星巖の如く、同じ詩人の妻紅蘭と相携へて、年中各地へ遊歷ばかりしてゐては、天保三年（四十四歲）にやつと彥根に行李を卸してゐても、物質上、家を成すことは出來ないでゐた。山陽は、以前からその狀態を見て、いろ〳〵忠告を與へてゐたが、金錢の事には

紅蘭がいつもその厚意を受け入れなかつた例しもあつた。今樗園が細香よりも梨影を世話したであらうことは、當然、小竹とても、それを聞いたなら同意を吝まなかつたであらう。

細香は今、目の前に、梨影その人をながめて、何と觀じたであらうか。

そこには「清操」の閃めきが見られなければならぬ。それ以上、細香の心中にこだはるものも何もあるまい。山陽先生薫陶のもとに、たゞ文墨をひとり樂んで、終生孤獨のうちに、その樂みを改めず、山陽の歿後にも梨影をたづねて、遺兒支峯・三樹の上にも、その心を用ゐた。梨影は、細香と對面の後、やがて廣島よりの同意もあり、立派に賴家へ入籍して、一に内助の勞をつくし、山陽歿後には、其の筋（京町奉行所）より、「貞婦」として旌表されてゐた。

細香は、其の後たび〳〵入京して、山陽の母梅颸とも文藝の同好者として仲も善く、最後に山陽と別れたのは、天保元年閏三月九日、京を離れて歸國の節、女史を大津へ見送るに臨み、梨影の配膳にて、山紫水明處に一宴を設けた。雨中話別の句に、

此れ濃州を去る、遠道に非ず。　老來、自から覺ゆ、しば〳〵逢ふことの難きを。

細香は、

琵琶の曲裏、更の深くるに坐し。　庭園、一夜、雨絲、斜めなり。

餘興に先生得意の平家琵琶の一曲を聞いて、その夜はこゝに宿つた。

十三日は、塾生―江戸の鹽谷宕陰・淡路の岡田鴨里・豐後の中島米華を伴ひ、大津まで見送り、松の唐崎に舟を泛べ、女史の陸上、歸路につくを見送つて、その別れを惜んだ。

二十年中、七度の別れ。　未だ此くの如く、別恨の纏はるはあらず。

誰か測らん、これが一生最後の訣別にならうとは。

二一、遊　歴（下）

その三、九　州　行

越えて文政元年（卅九歳）二月五日、父春水の三年の喪を果たして、廣島へ歸り、七日と廿一日に比治山の墓參、十九日の祭事も了り、先づ長崎へ向け、三月六日、大坂から伴ひ來た門人後藤松陰（廿二歳）を從へ、九州遊歴の旅に上つた。

十四日、下ノ關へ着いて、西細江の豪商伊豫屋吉右衛門（廣江殿峯）の宅に入つた。三男常藏（秋水）は、さきに田能村竹田の紹介に由り、京都の塾に來てゐた。

廿四日、富士登山のため來合はした末弘雲華と同じく、秋水と甲柳庵の案内で、阿彌陀寺の先帝會（安德天皇御陵）を拜し、づいで、長府に入り、醫小田順藏（南畝）を訪ひ、清末藩士渡邊厚輔（東里）に逢ひ、和漢詠史の屏風を書き、下ノ關へ引返して、四月廿四日、出立、豐前大里へ渡り、廿六日、博多箱崎宮參拜、千代松原に龜井昭陽を訪ひ、その父南冥が近く文化十一年三月八日（七十二歳）に歿したことを聞き、文化十三年の春、父春水（七十一歳）の亡くなつたことを思ひ合はせて、

風樹（親に別かれし悲み）、知る、君が我が感を同じうするを。　酒閒、涙あり、暗に襟を沾ほす。

博多滯在中にも三度訪問して、その間、松永宗助（龍門また花遁）の宅に寓し、上村尙庵（米山）・奥村源兵衞（玉蘭）・大賀寛庵等と往來した。

こゝへ來る途中、赤間の宿で聞いた村の節女、政の傳記を、龍門の爲めに書き與へた。藩學教授井土左市郎（學圃）の撰文した碑が今に存してゐる。

十七日博多出立、龍門等と同伴、太宰府天滿宮へ、都府樓址から天拜山に登り、湯ノ町溫泉で一行に別れ、佐賀に入つて古賀仲安（朝陽）の宅（賜金堂）に、中村咸一（嘉田）等と

會飲、鯨を肴に杯を傾けた。今までは實際下戸であつたが、下ノ關と長府で、灘目の醇酒「澤の鶴」を飲み始めてから、酒味を解したと言つてゐる。席上「捕鯨歌」の七言古詩には、酒氣がぷん〳〵とにほふ。

それから大村へ、大村から長與へ渡り、長崎に着いたのは、五月廿三日であつた。

一旦、材木町の中尾長三郎方に行李を解き、築地の長門屋信藏方（富觀樓）へ移つてみると、不思議にも、こゝは以前、武元登々庵が長らく宿つてゐたところであつたが、その人は、ことし二月廿四日に、京都で歿した事を、まだ聞いてゐない。

通詞の頴川四郎太に招かれて、圓山上の別莊に泊つてゐる時、六日にオランダ船が一隻入港して、ナポレオンの從軍醫であつたといふ船客から聞いた話を、「佛郎王」の詩に作り、また「荷蘭船」の作もあり、梅園から注文とて、ヘルヘトアン（天鵞絨）などを求めて廣島へ送つた。

蘭船の見學がすむと、今度は、唐人屋敷を廻はり、文字を解する人物をたづねて、乍浦（浙江省）の陸如金・楊西亭等と筆談、

吳中（江蘇省）は、文學の盛んなところと聞いてゐますが、今の大家は。

潘石泉・黄山霞あたりです。

袁隨園は、こちらで名高いが、今は故人となつたでせう。

亡くなりましたが、沈歸愚が控えてゐます。（沈は詩文に長じ、いろ〳〵その船載本が來てゐる）

虎邱・西湖の風景は。

虎邱には十八古跡・西湖には十景があります。

秦淮の遊船は。

金陵（南京）城外の貢院（文官の試驗所）一帶の河房に歌妓がゐて、試驗の頃の雜沓は昔のまゝです。

名に聞いてゐた江芸閣が、船の都合で歸國してゐたのが殘念であつた。ゆつくり話もしたし、贊を書かせようと、樂みに持參した細香女史の墨竹も無駄になつた。

中秋には、楊に招かれて、看月の宴に赴いたが、それよりも愉快な事は、折からこゝの警備に出張してゐる古賀穀堂と、土地の名士遊龍彥次郎（梅泉）に案内されて、又の日に月見舟を泛べたことであつた。

松陰は、その時母の喪に美濃へ歸鄉してゐた。梅泉は長崎第一の風流人として知られ、田能村竹田も、文政十年の遊歷に、面會を樂んでゐたが、早やその歿後であつた。

通詞の水野媚川に逢つたとき、「丸山花月樓の袖笑は、江芸閣とは、いつも書面の往復をしてゐるから」と、わざ〳〵紹介して呉れた。竹田も文政十年には、偶然、芸閣の在留中とて、得意の「塡詞」を添削させた。「塡詞」は昔の樂譜に合はせて作る歌ひもので、我が邦では平安朝に、前中書王兼平親王が、始めて作り試みられたのであつた。芸閣は、久しく長崎へ來て畫名の高かつた江稼圃の弟に當る。

八月廿一日、梅颺へ手紙、

私義、何卒八月頃には、國元迄歸り申したく、心組み居りい處、當地之處、何角仕舞おくれ申いて、漸く今明日出立の義に相成り申い。これまで參りいて、肥後・薩摩へ參りい事やめいも、本意なき故にい。

旅猿（遊歷）の癖は、先大人御嫌ひに御座遊ばされい義、今に忘れずい故、此度を旅の仕舞と仕りたく、左いへば序での事、どこもかもあるきいて、遺憾なき樣仕り、歸り申したく存じ奉りい。

出立は廿三日になつた。茂木から熊本船に乘り、島原灣の千々岩沖で、その夜、暴風にさらはれ、命からゞ〳〵小島に上陸、廿五日、熊本に着した。

先づ訪問したのは、父の舊友・鹽屋町の藩儒辛島才藏（鹽井・六十五歳）であつた。「亡父とはお心やすくしていたゞきました處、三年以前死去、只今私長男餘一が相續いたして居ります」との口上に、「それは〳〵、私はあなたを一目見るなり、春水先生の御再來かと、うれしく存じます」と叮重に扱はれて、「これから又鹿兒島へ參りたい」といふ。「入國のむつかしい土地ですが、それは、何角とお世話いたしませう」と言つた。

銀杏城から、清正公の祠へ參り、故村井椿壽（琴山）の子冠吾（蕉雪）を訪ひ、また鹽井に紹介され、鹿兒島では藩儒鮫島吉右衞門（白鶴）、町家では廣小路横堀の藤田太郎右衞門を尋ねることにして、廿九日、松橋へ向ひ發船した。

翌日は天草島に寄泊の上、佐敷に着いた。

眠、驚いて、船底、寒潮響く。　天草洋中、夜、櫓を繫ぐ。

太白一星、光、月の如し。　波間、照らし見れば、巨魚跳る。

と吟じ、それから又、長崎の吉村正隆（迂齋）の詩、

三十六灣、灣また灣。　蜻蜓（日本）、西に盡く、白雲の間。

洪濤萬里、豈國なからん。　一髮、青は分つ、吳・越の山。

から、ヒントを得て、それを七言短古にして、

雲か、山か、吳か、越か。　水天髣髴、青一髮。

萬里、舟を泊す、天草洋。　烟は篷窓に横はつて、日、漸く沒す。

瞥見す、大魚の波間に跳るを。　太白、船に當つて、明、月に似たり。

の名作を留めたが、いろ〳〵字句は改められてゐた。

唐の韓愈の作に、「東方半明」と題して、

東方、半ば明けて、大星は沒す。　獨り太白の、殘月に配するあり。

あゝ、殘月、相疑ふなかれ。　同光共影、須臾の期。

殘月暉々として、太白は睒々たり。　雞、三たび號んで、更は五點（五夜の鐘——曉）。

この詩は、唐の順宗が卽位しながら、政權は太子（後の憲宗）の手に握つてゐたことを諷した作と解せられ、「太白」を太子、「殘月」を順宗に見立てたといはれてゐる。そこで又この「天草洋」も、同じく「太白」を德川幕府にあてつけたなど〻言ひはやす人もある。

津奈木に着いて、醫深水玄門（春山）へたより、鹿兒島行の案内を頼めば、

我が爲めに指南す、南薩の路を。橋窓、一夜、秋燈を剪る。

快よく、秋の夜長を、庭には蜜柑の木が一ぱいの座敷で語り明かし、次の日は先きに立つて南へ〳〵と峠を越えつゝ、鹿兒島領は、出水口の關所まで、夜に入つて案内してくれた。

關門をくゞつて百姓家を叩き起し、八日の朝、その紹介で、松島道益といふ醫家で朝食して、春山と別れ、熊本で受取つた村瀬藤城から送つて來た『宋詩合璧』の稿本に序文を書き、それを折よく京へ仕込みにゆく呉服商人へ頼んで、寺町鳩居堂からの常便で送らせることにした。それは山陽の指圖で、王漁洋・袁隨園の原本から選抄して、出版を急いでゐるのであつた。

阿久根（阿嵎）峠を越えて、川内へはいつたのは、恰も九日の節句に當り、大小路の永井瀬兵衞方に宿つて、長崎で餞別の、伊丹の七星（酒）を瓢に詰めて來たのを幸ひ、それを菊酒にして疲れを休めた。

次の日からは、阿久根の本店から、こゝの支店に來てゐた河南源兵衞といふ商人の望みで、京を立つてからの道中の詩を長卷に揮毫して、しばらく筆を執らなかつた物足りなさを

一時に發散した。

薩藩出身の重野成齋は、鹿兒島では、よそ者の監視がやかましかつた上に、山陽が遊歷して來ても、一向相手にしなかつたのを、河南は町人に似ず、書畫を好み、上方へ商用の往復で、山陽の名をよく知つてゐたから、好いものを書いてもらつたが、士分の方では何も別段頼まなかつたのは殘念だと言つた。

ところが、私の最近に見た一幅に、水墨山水の、鹿兒島から見る、櫻島の實景を主山に、海岸にはいろ〳〵珍らしい形の船――琉球船か――を描いたもので、その題識に、「日隈老兄」といふため書きのものがあつた。その人は判らないが、おそらく藩士ではあるまいかとおもふ。また、かういふ風に眞景を寫しては、俗氣紛々だが、一時のなぐさみにしたといふようなことが識るされてゐる。いつも紙幅を突き拔けさうな、得意の高過ぎる山ばかりの物とは、全く風變りのめづらしいものであつた。

城下では、辛島鹽井が紹介の藤田へ泊つて、不思議にも京から先着してゐた小田良平（百谷――海仙）と、相客になり、滯在中は、これも鹽井が噂してゐた鮫島白鶴――成齋の舊師の外、今ひとり同じく藩儒の、伊知地猪兵衞（季幹――赤崎海門の母方の甥）も、幸ひ江戸

の聖堂で、昔の同窓であつたから都合がよく、錦江灣の酒樓で對酌した。櫻島の實景も、こちらあたりから眺めたところを寫したものらしい。

廿九日、茶山へ手紙、

鷲入りいは、鹿兒島の紛華（繁昌）に御座い、其の謀國（政策）の拙、笑ふべき事のみに御座い。

それは大隱居と呼ばれた、先代の藩主島津重豪侯（榮翁）が、藩士を始め一般の風俗が、武骨過ぎるのを氣にして、上方風を奬勵すべく、先づ上方藝妓を輸入し、又芝居をはやらせて、言葉づかひの軟化を圖つたといふわけで、名高い兵子組の荒々しさまでが鈍つて來たといふのであつた。

「肥後の加藤が來るならば、えんしよ（硝藥）肴に、團子（彈丸）會釋、それでも足らぬといふならば、首に刀の引出物」を詩にして、

衣は骭（膝こぶし）に至り、袖、腕に至る。　腰間の秋水、鋏、斷つべし。　人、觸るれば、人を斬り。　馬、觸るれば、馬を斬る。　十八、交りを結ぶ、健兒の社。　北客能く來らば、何を以てか酬いん。　彈丸・硝藥、是れ膳羞（肴）。　客猶、屬饜せずんば

（喰ひ足らねば）。　好するに（引出物として）、寶刀を以て、渠れが頭に加へん。

この「前兵兒謠」にかぶせて、「後」の一首には、

蕉袗（さつま上布）、雪の如く、塵を受けず。　長袖・緩帶、都人を學ぶ。　怪來、健兒の語言好きを。　一たび南音（鹿兒島訛り）を操れば、官長は嗔る。　蜂黃は落ち。蝶粉は褪せ。　倡優は巧みに。　鋏劍は鈍ぶる。　馬を以て妾に換へ、髀に肉を生ず。眉斧、解剖せん、壯士の腹。

薩南男兒には、もてなかつた文句かも知れない。

もう一つ、

螺青、濶く劃して（前髮を短くして）、兩脩蛾（眉をつくらふ）。　六拍（調子そろへて）、齊しく謳ふ、白水（出水）の歌。　誰かいふ、銀簪、時樣を學ぶと。　兒家（兵子組）、壓せんと欲す、鬢の鬱鬱たるを（ばらけるのを）。

「銀のかんざし、伊達にはさゝぬ、きりし前髮、とめるため。」が、その本歌であつた。

三十日の朝、出立。

十月一日、大隅へ廻り、加治木・大口から、薩・隅・肥の分水嶺、龜ケ背越えに、水股着、

徳富太藏の宅に入る。分家同太善治（鶴眠）の爲めに「成簣」の額面を書いた。鶴眠は、故淇水翁の父、蘇峯翁の令祖父に當り、現に翁が東京大森の山王草堂に、そのまゝ掛けられて、文庫の名になつてゐる。

二日、深水家へ引返し、「龜嶺」の詩を揮毫して贈つた。

水股にては、竹原の歌人・竹廼戸道工彦文（足立屋喜太郎）の碑を弔した。彦文は、山陽の祖母道工氏仲子の一族であらう。遊歴中、享保廿年正月八日（四十二歳）、この地で客死、時の代官水俣吉左衞門の手で東福禪寺に葬られた。

八代から發船、六日、熊本へ還り、村井蕉雪を訪ひ、又京の篆刻家河合圭齋夫妻に逢ふ。

廿日、博多・松永龍門への手紙に、「先日一見した明の盛茂燁山水の一幅は、今も夢にみる程に欲しい、上村米山とも相談して、手に入るように願ひたい」と頼んだが、後に首尾よく望みを達して、九州みやげの一つとなつた。今一幅蕉雪の宅で見た「如泰」落款の山水は、後に久留米から三度まで熊本へ引返して、手に入れようとしたが、「さうしつこく望まれる程では、とても大切に藏つて置きたい」と、全く水の泡となつてゐた。その時また、明の王建章の畫を見て、それも割愛して欲しかつたが、「これは友人の物で、いづれ考へて置かう」

と蕉雪はいつた。

二重から、坂梨・九重峠を、岡の城下へ着いたのは、廿三日の夜で竹田は直ぐに來訪した。

廿六日には、藩の用達加島屋吉郎兵衞（古田富上）の別莊（洗竹窓）で、竹田の外、藩儒角田才次郎（九華）と共に、茶會が催され、大穀屋へ宿をとつた。

廿九日――滯在が連日の招宴で延び〳〵になつて――春曦樓の送別會へ往く。その顔ぶれは、竹田・九華・富上の外、岡崎仲達（盤龍・彦根藩醫、井伊家出身の藩主久教侯附）等で、取持ちには、竹田の一子太一（小花海）はじめ、門人その他大ぜいが來てゐる。餘興に書畫の揮毫が始まると、酌婦のお萱が、山陽に附切りで、墨を上手に磨り、それを皆が喝采した。

竹田の門人金作は、しろうとの菓子が自慢で、いつも造つて、口取りに出す。山陽は「京の龜屋（良則）よりもけつかうだ。竹田書屋の野菜とゝもに、道中第一の御馳走」と、それを紙包みにして、翌朝未明に出立――駕籠では痛からうと、加島屋が長崎渡りの革蒲團を貸してくれた――隈町へ向ひ、黒川に一泊して、二日に井出口、三日に到着して、同じく加島屋の添書をふところに、酒造の鍋屋（森五石）を訪ひ、その子成作（仁里）・甥文兵衞（荊田）等の世話で、西敎寺の書院に落着いた。鍋屋一統は、本分家とも皆が文雅風流の人達で、

詩文・南畫の流行したのは、前後來遊した山陽・竹田のおかげだと仁里はいつてゐる。

そこへ、日田の廣瀨淡窓から、塾頭中島增太（米華）が、名代として挨拶に來た（米華は、その後、山陽の塾に入る）。

八日、館林萬里の案内に由り、その親戚―淡窓の宅（塾は咸宜園）へ招かれ、萬里の伯父・丸屋（千原）幸右衞門と同席、夜は主人の伯父平八宅（秋風庵）に一泊した。九日、隈町に引返し、やがて「如泰」一件で、筑後川下りに熊本へ向ひ、「西陲、獨り存す、臣武光」の名詩を、その舟中で腹案した。

やがて又引返して、久留米に入り、藩儒樺島勇七（石梁）を訪ひ、廿五日、又隈町へ戻り、翌日、淡窓の詩會に臨み、かの「客あり〳〵」の詩を贈られ、又課題・加藤清正の詠史を作つた。四日、その告別に赴き、萬里の外、仁里・荊田も同席して、長崎で得た明の屠隆・清の蕭尺木その他の書畫を展觀に供した。

五日、出立、淡窓・萬里・仁里等に送られて、森實（もり）から耶馬溪に入り、宮園に一泊。

六日、いよ〳〵探勝を樂んで、英彥山（ひこさん）が正面に山彙の王座を占め、山國川の水源も、大體の見當がつき、岡の城下から、隈町・日田へと歩いて來た方角から考へても、こゝらの山の

六、「筑後河を下る」の詩幅　文政七年（四十五歳）

文政元年十一月、九州遊歷中、豐後隈町より、筑後河を下り、菊池正觀公武光の古戰場、太刀洗の舊跡を弔してこの詩を作りしを、同七年江戸・菊池五山の爲めに書したるものにして、特に烏絲欄（黑線織）の絹本を用ゐたり。

その識語には、五山が正觀公を稱して、その祖先なりとし、感ずる所ありて、この書を索めたりと云へり。（久留米・石橋鶴次郎氏所藏）

たゝずまひは、全く英彦山の支脈と感じられた。それは想像してゐたやうな、ちつぽけな渓谷ではないと、いそ〳〵して、北へ〳〵と進みつゝ、奇岩怪石の取つ組み合つた天來の意匠は、これが南畫の精髄だなと感じた。

大抵峯勢・石皴は、董（源）・巨（然）が刻意の圖の如く、老木の葉脱して、槎牙瘦古なるは、倪（雲林）・黄（大癡）の筆法にして、苔の枯蹙蒼渇なるは、王叔明なり。

大體、耶馬溪の大景觀は、その主要とする岩石が集塊岩・凝塊岩の集積で、獨り我が邦だけではなく、實に世界に珍らしい一大特色を見せてゐる。そこに天工神斧のたとへようなき放れわざが見られて、時代の古い熔岩を冠り、更にその上へ阿蘇の新しい熔石がくつつき、それが不平均に浸蝕され、幾百千年の風雨にたゝかれて裸出しになり、そこへ、無我夢中に樹木が根を張り、見渡す限りに亂舞して、四季とり〴〵の花や新綠、乃至紅葉から寒林枯木の、ころもを着かへてゐる外、川あり、溪谷あり、空にはその日〳〵の晴れくもりに自然のおめかしを見せつけてゐる。

今、山陽は、十二月五日といふ嚴冬の澄み切つた空氣の中を、宮園から踏み出して、山國川の左岸をたどり、東へ〳〵と前後左右、この大景觀に眼をおどろかせつゝ、ふと見ると川

向ふに現はれたのは、屏風を立てたような一大岩壁に、あつらへ向きの瀑布を點景する柿坂の茶店に今しがた、奥山から射とめて來たゐのしゝに、獵師が庖丁をあてゝゐる。走り寄つて瓢を取り出し、それを肴にゆつくり休憩して、ロノ林（屈智林）の橋を渡り、古城の正行寺にたどり着いた。

雲華に迎へられて三日を過ごし、九日から改めて、雲華の外に中津の松川修山と、青村の曾木墨莊の四人づれで、羅漢寺から仙人岩を見物して、檜山の淨眞寺に宿り、またもとの屏風岩の前で快飲した。「こないだのお客さまが、又見えた」と、茶店のおやぢは、「こんな山の中へ、お寒い中をまた御見物なされますか」、とうろ〳〵した。一行はそれからそれへと歩き廻り、ロノ林まで戻つて來たが、用意の酒がなくなり、雲華は寺へ使を走らし、小樽を駄馬につけて歸つて來た。やがて雲華はその馬に打跨り、山陽は駕籠に乘つたが、どうしたはずみか、底を拔かして、雨あがりのぬかるみへ落ちた。その夜は阿保村で宿を取り、寺へ戻つたのは十三日であつた。

山陽は、これだけ日數をかけて、見物したものゝ、それは中津街道を中心にしたゞけの小區域で、それでは迚も今日大規模に擴張された比ではなかつた。私が先年歩いたゞけでも、

深耶馬の目ざまし谷に目をさました外、布目の瀑から、美し谷の溪流に、長くも
秩父宮殿下を首め奉り、宮様方の御遊覽あらせられた、こゝらあたりの絶勝を眺め、玖珠郡
森町へ通ずる溪谷を見て廻り、轉じて守實方面の天工・千壺峽の兩峽から、津民（蔦美）の
奥へも踏み入り、更に山移谷の南耶馬から、椎屋耶馬の宇佐方面、それから又、裏耶馬の方
面を、立羽田連峯へと脚を伸ばし、蔦ノ巣岩や、舊藩時代、舊藩主森侯別邸の在つた鶴ケ原
――その頃奇岩快石の間に鶴が飛び交うたといふ――の尾ノ池あたりから、又々紅葉谷の方
へと見物の目を睜り、更に〳〵英彦山彙の一脈として、竹田町の方面へまでも取り込めば、
そこに大耶馬溪の全貌が始めて活き〳〵する。

山陽時代には、とても〳〵そこまでは、目も脚も屆かず、ほんの今日、耶馬溪電車の走つ
てゐる方角だけしか見てゐなかつただけにも、それを「海内第一」とほめ立てたが、今日現
出した大耶馬一帶巖石群の大景觀を見せたなら、定めて何といふであらう。「だから海内第
一ぢやないか」といふかもしれない。

私の見てあるいた時は、恰かも脇水理學・田村林學兩博士等が、公務を帶び、國立公園候
補地として巡回の折で、九大の竹内教授も、植物研究のため、同行されてゐたが、結論は、

みなその資格に不足なしといふわけで、中にも脇水博士の如きは、山陽が英彦山を中心に見
立てた眼光の鋭どさにはおどろく、その候補地大耶馬には英彦山を問題外にするわけにはゆ
かないといふ話であつた。

十二月十六日、山陽は正行寺を出立して、中津に入り、田中信平――田信で名の通つた畸
人をおとづれ、古書畫器玩を一見して、松川修山、その他の諸友に別れ、一路、大里へ引返
し、下ノ關の廣江宅で越年して、京都東山雙林寺の舊友月峰（二世大雅堂）へ手紙、

（薩摩より）そのさきは、唐より外に行くところもなければ、それより引返し、赤間ケ
關までは歸り申い。京には、さぞ德太郎――その頃の變名――は籠城得せぬで、西行な
どゝ申すべくい。それはともあれ、何ぞ京の者共の、目玉を引くり返す樣のものを獲て
歸りたくと、上、碧落（天まで）、下、黄泉（地の底）、天のさかほこ（日向）・石人（久
留米・磐井）の岩穴までもさがしいへども、とんとないと云つたら、ひどいものにい。
……されども、少々は御目にかけいものも御座い。

道にて取りい金（潤筆）は、こと〳〵く物を買うて、空囊にて歸京いたしたきものと存
じいへ共。（買物が）ないと來ては困つたもの也。金は何うしてもあまり申すべくい。

しかし、よつぽどなく致しい。

大した古書畫類の買物はなかつたが、「少々」は御覽に入れるといふ、京で唯一の目利きといはれた月峯に見せる品物としては、あの蕭尺木や、倪文正公その他いろ／＼、自慢のものを手に入れてゐる。

中にも、この倪文正公（明末の大官にして義士の倪元璐）の書幅は、歸京後、人々に見せびらかした逸品で、中にもその自慢の甚だしかつたのは、文政十二年十二月十五日、日向延岡の新妻旭峯の詩稿を添削した時の文に、

今夜、令郎（塾生新妻金夫）と、丹酒劍菱・泉川の二品を飲み、佐くるに（肴は）華腦魚・鳧水の小鮮を以てし、瓶には水仙あり、壁に挂けたるは、乃ち倪文正公の眞蹟なり。

文政二年（四十歳）正月元日、九州みやげ端硯のつかひ初めに、下ノ關で新年の記念に試筆して、殿峯・秋水に贈り、船中、立春を迎へ、上ノ關の藩醫南部彝（龍門）・茶人田中彦七（有時庵）に招かれ、大道の庄屋上田庄藏（不昧）宅では、島津侯手植の「古松の記」を作り、二月四日、いよ／＼廣島に還り、こゝに昨年三月六日、出京以來三百廿三日といふ大旅行を了り、それを遊歴の打止めとした。

三、歸省と遊覽（上）

その一、文化十一年　第一歸省

文化十一年（卅五歳）八月十日出立、廿三日に廣島へ着いたのが歸省の第一回であつた。

それが全く豫報なしの突然――春水もその顏をながめて、只「飄然として至る」と日記に書いてゐるのは、よく歸つたとも、なぜ戻つて來たともいへなかつたからであらう。

あれだけの手數をかけて、やつと神邊へ引取られ、足かけ三年とは言へ、丸十五ケ月足るやたらずに飛び出したまゝ、今ごろ飄然と顏を見せられては、見る方が途まどひする。

春水は、山陽が一旦京地から身を隱し、大坂へ遁げ戻つてゐた時（文化八年四月廿七日）、それを聞いて、金山重左衞門へ送つた手紙には、心配よりも立腹の限りを盡くし、

いかなる田舍邊土に居いとも、名もあげ、天下の人と、人に尊仰せられい事、仰せの通にい。然るに田舍にて淋しきの、又大所に住居仕りたくなど申すは、若輩千萬にてい。是れは先年の病氣も御座い故、存じつきい事、得やめ申さずい性質と、自分に樂をして、親に不安心をかけい段、何とも存ぜずい不敵の心底は、神罰遁れ難しとも存じいへば、

親の身に成りいへば惡敷いて、又不便にも存じ奉りい。

御國は離れ、備後へ遣はし切にいへば、菅太中と申し談じ、兩地の內へ、何分引取りい様にと申す事に相成りいへば、先年の上塗仕りいものに成りい。只今私料簡に叶ひ申さずい所、久離の、勘當のと申す事は、父子の間にて相成らず、國法にいへば、又々引取りいて、圍へ入れい外は之れなくい。

と迄言つたのは、この一件から、今の自身の境遇にいかな迷惑が持ち來たされるやも知れないといふ心配からにもせよ、こゝまで言ひ突つ張られては、山陽に對して多少の同情を寄せてゐる金山も、一寸手のつけようもなかつたであらう。

そこで親子の間には、むろん交通は絶えてしまひ、取りつく島のない所から、そのまゝに月日は流れ、久しく歸省の出來なかつたのに足摺りしてゐたが、今ではやつと京へ立戻つて元々通り塾を開き、世帶の道もつき、小石の計らひで、內緣の妻は、その實すでに姙娠の身にもなつてゐる所から、永年のお詫びも兼ね、乘るか反るかの、危ない綱渡りを覺悟の上から、今飄然と歸省の顏を見せたので、それも小石と相談の上、思ひ切つて立ち歸つたのであつた。

物は窮まつて通ずる、あれだけやかましかつた父の顏も、案外恐ろしくはなかつた。一番心配の種にしてゐた姙娠の一條が、事實、にがい顏の紐を解かせて、それでは京住居も、結局安心の臍を堅めさせたとは、思ひもかけない安心であらねばならぬ。

九月十八日、小石への手紙に、

此度の歸省、誠に大出來にて、國元首尾も甚だよろしく、夜あけい心地仕りい。此の以後、京城僑居もいよ〳〵安穩に御座い、御安心下さるべくい。

國元老人株のものなど、何分京師に尻を据え、堀川（伊藤）、又は東洞家（吉益）などの様に、儼然家を成しい様然るべくい、一代切の風流（遊び半分）はいかゞと申い。

かの朝雲（梨影）腹ふくれい事申いへば、それは願うてもなき一段の事也、必ず（その生れ兒は）外へ遣はすなど〻申事なさず、內にてそだて然るべく、別に乳母を置くなども、二度だめなれば、その朝雲にそだてさせよと申い。

「朝雲」は、宋の蘇東坡が、卅九歳にして、杭州通判を勤めてゐた時、侍婢になつた王氏の娘で、十二の年から廿三年間に亘つて給仕してゐた。梨影は侍婢ではなかつたが、それを王朝雲になぞらへて、自身は東坡氣取りにさう呼んでゐた。

春水は、又さういふいきさつを、小石への手紙（八月廿五日）に、

大豚（山陽）事、こま〳〵御示諭下され……今度の轉宅（車屋町）も、却つて其の所を得い様思し召され、土着の者も入門等之れあり、召使も相應に厨下の取締（家事用）仕りい事、萬事、それらしく思し召し下されい段仰せ下され、此の元にて妻へも申聞け、別して〳〵辱なく存じ奉りい。

「召使」といつたのは、全く「侍婢」として見てゐるのであつた。

それから又、九月十日にも、

今度、襄歸省の儀、御同意に思し召され、御從吏下されい儀と忝なく存じ奉りい。家内など久振り對話、大慶仕りい。

只今京寓、浪遊とは申しながら、本府士籍に罷在りい老拙ゆゑ、餘一事（身の上にもかかはる事）も之れあり、かた〳〵以て其の所は離れ申さずい。これに自分離れ申い儀は、勝手次第に御座い。此の所持重保護仕りいへば、其の身も保全仕りい事に御座い。

これより先、春水は文化十年三月一日、有馬湯治のため、餘一（聿庵・十三歳）を連れ、門人小寺藍洲（鳩峯の子）を附添に、東上した時、山陽には逢ひたくはあり、逢ひたくもな

しといふ調子で、むろん東上の事は一言も知らせなかつたが、茶山からは早く知らせてもらひ、小竹からも「廿一日御來坂、今日（廿四日）、こちらへ御越しの上、あなたの身の上は、萬事私方へ御任せ、京では金山へ託するとの御言葉の上、茶山先生からも親父（三島）へ、この機をのがさず、中に立つて調停せよとの事ですから、早速御下りの上、程よく取り計らひ、京地でも御陪遊の出來るよう致しませう」と、山陽・小石宛ての連名で通知があつた。

これは幸ひと、すぐさま大坂へ飛んで下り、篠崎家で首尾よく對面の上、これから入京するといふ話で、又も馳せ歸つて、いろ〳〵用意してゐるところへ、四月四日に入京した父を宇治見物に案内した上、その下坂を伏見に見送り、十九日に又大坂へ走り、廿三日にその歸藩を西宮で別れて歸つた。

それから程なく梅颸への手紙を見ると、

父上様より、當春拜領仕りい金子、並びに餘一の土産（一封、これは母の心づかひであらう）、その儘にのけ置き、何ぞこれにて調へ申すべくと存居りい處、（方廣寺）大佛の宮様へ虫干拜見に參り、其の歸るさ、（清水）藪ノ下にて、青貝の書棚見當り、四條・升屋五郎兵衛に見てもらひい所、隨分利口の物と申い故、調へ申い。

これでみると、一時はそれ程、親子の間には何の波瀾もなかつた形ではあつても、又その内に春水の方には何等か感情のもつれがあつたらしく、右の金山宛てのような事になつてゐたものゝ、つまりは、今度の歸省に萬事暗雲は一掃され、その歸京のはなむけとして、春水は、

單身、すべからく自重すべし。　來往、豈期なからんや。　慎めよや、風霜の候。　前途には險巇多からん。

わが身をよく自重さへしてゐれば、いつ又歸省しても、世間は何ともいふまい。これから又ぼつ〳〵寒くもなつてくる、萬事に用心しないと、世渡りは恐ろしいものだぞ、といつた父の心中は推諒されねばならない。

他人に向つては、わが子をいかに言ひ罵つても、心の底には慈愛の泉を湛へてゐる。その又、子にしてみれば、親の脛だけかじつて、只四角四面に、その家督を後生大事に邊幅だけを氣にしてゐてもつまらない、「宿志」の山は、希望の海は、向ふの空にそゝり立ち、渦を卷いてゐるではないか。

さういふ暖かい空氣の中で、九月六日には、杏坪父子の來邸を迎へて、一同揮毫の清興に

耽り、携へて來た硯を杏坪に贈り、八日には父と同じく、富士屋の古書畫展觀に赴き、九日の節句には、家内一同、妹三穗子（十子改名）も里返りして、菊酒を酌み交はし、春水はめづらしく醉墨の菊を描いたのを、心うれしい記念として貰ひ歸り、永く大切にしてゐた。

その時、春水は又小石宛ての手紙をしたゝめ、歸京の上これを手渡しせよと命ぜられた。それが右の手紙であつた。

廣島を辭したのは十一日であつた。海路、竹原へ向ひ、音戸瀨戸（おんどのせと）へ上りて、翌日到着、春風館に入り、逗留中、後の名月を玩び、明日、尾道舟に乘るつもりを引きとめられ、一日延ばすことになつてゐた。それを十四日の手紙に認め置いて、兩親への發送を託した。

尾道では、熊谷幾右衞門の、大寶山別莊の「挹翠園」の記を作り、神邊へも立寄つたが、茶山はまだ不在中で、江戸からの手紙の中に、

今しばし、隅田川原に、そゝぎ居り、吉備の菘（たかな）を、おもふ頃かな。

と認めてあつた。

茶山には逢へなかつたが、たま〳〵江戸の市河小左衞門（寛齋）が、長崎歸りに來合せてゐた。

それから鞆津の舊友・春水門下の菅東嶠に招かれ、十五日には大坂屋平左衛門（上杉氏、また三島怡齋）の家に入り、「對仙醉樓の記」を作り、滯在中、田能村竹田が大坂より歸鄉の航海中、風雨を避けてこゝに寄泊して來訪したのを迎へ、大坂初對面以來の出逢ひをよろこびつゝ、互に筆を執つて、書畫の合作を試み、竹田は、雨傘を斜に樓上目がけて道を急ぐところを寫し、自身はそれに贊を書き添へた。

それで、此の幅を記念に持つて歸るつもりでゐたが、ふと思ひ出したのは、京に留守を託してゐる廣江秋水が、もと〳〵竹田の手引きで入塾して、この旅行中、久しく自身の歸りを待つてゐるであらう、これを送つてやれば、ふたりの消息も知れて喜ぶに違ひないと、そのまゝ京便に託することゝした。

廿三日、岡山に入り、武元北林を閑谷學校に訪ひ、黄葉亭に遊んで、その柱聯を題し（額は春水の書）、またその記文も、ことしの歸省に先だち、在京中にそれを作り、「余まさに歸つて、吾が父を省せんとす、其れ必ず路を閑谷に枉げて、烈公の遺構を仰がんとす」と述べてゐた。

長尾に入つては、小野家の爲めに、「移山亭の記」を作り（庭中にある三峯形の名石を富

士に見立てゝ）、倉敷では、觀龍寺の詩僧敎存（風牀）を訪ひ、岡山では、藩儒姫井貞吉（桃源）に囑せられて、その愛玩の「桃源石の記」を作つた。

歸京したのは、十二月二日であつた。

その二・三、文化十二・三年　第二・三歸省

文化十二年（卅六歳）四月二日、父の見舞として、又廣島へ向ふ。去年の歸省で暗雲は一掃された今日、この旅行には、一層心も和ごみ、氣分もいそ〳〵と、脚も輕かつた。

七日に歸着してみると、きのふは、めでたい日柄で、聿庵（十五歳）がいよ〳〵正式に、祖父春水の嫡子として、家督相續を承認されたといふ沙汰があつたと聞かされた。

八日には、妹三穗子（廿七歳）も里歸りして、水入らずの會食に、その手料理の田樂に舌つづみを打ち、一酌の後、春水は卽吟の一首、

知る、汝の蹭蹬として（生活に疲れて）、一敝裘（衣服にも事を缺き）。寸金の地、淹留に耐ふるを（都大路に淋しく暮してゐることを）。雨窓の情話に、今夕を憐れみ（今夜は春雨のしと〳〵ふる中に、一家團欒してゐるのをいぢらしくおもふ）。菊酒の娛遊に、去秋を憶ふ（おもひ出すのは、去年もこの席で菊の節句を祝うた）。

と親子親愛の情を見せ、また、

但いふ、衰老、死せずと雖も（七十歳になつても、まだ〳〵この通り元氣にくらしてゐる）。汝能く帆席、潮頭に駕す（病氣見舞に來て、歸りには海路をはる〳〵と御苦勞であつた）。

來がけには陸路であつたが、歸京は船ときめてゐた。

ことしも父の機嫌は、又日本晴れであつた。義弟景讓は、ことし正月廿八日（廿六歳）に歿し、兩親の悲みもおもはれたが、遺腹の子として三千三（達堂）が、三月七日に生まれてゐた。聿庵は景讓の死後、家督相續者となつたのであつた。思ひきや、これが最後の父子對面の一席にならうとは。

十四日、發船、海上不穩のため、丸龜にて上陸、廿七日、讃岐金毘羅に近き榎井の日柳惣兵衛（燕石父）を訪ひ、翌日は象頭山に登り、宮職片岡民部（章範）に逢ひ、高松に入りて、後藤彌之助（漆谷）の宅に宿つて、天平古經に題識の文を作り、伏石屋（鈴木理兵衛・三橋）の宅では、英一蝶の黄大癡富春山圖卷摹本・藍田叔の山水四幅對、及びその亡妻小香女史の遺墨「墨華書帖」にも詩を題した。三橋夫妻は、さきに入京して、木屋町の水樓に居た時、

竹田も訪問して、その席上女史の水仙を畫くのを見たと言つてゐる。

歸京したのは、五月十三日であつた。

文化十三年（卅七歳）二月十九日、父の危篤を聞き、門人今井良吾を從へ、いそぎ廣島へ向ひ、途中神邊にて茶山に面し、その家に備へつけの駕籠を借り、廿四日に歸着してみれば、父は早や出立の日（十八日午前零時過ぎ）、すでに病歿して、けふは葬後三日目であつた。

その涙を卷紙ににじらせて、塾長後藤松陰、及び植松傳吉へ、

晝夜兼行、廿四日朝、廣島に着しい所、家翁療養相叶はず、十九日の曉天に易簀、葬埋も相濟みい處にて、天に呼ばひ、地に喚くも、また逢ふべからず、泣血こも〳〵下り、五內（臟）裂くる如く、心底萬々御察し下さるべくい。

されども病中にも、拙者在京、徒に投げ（開塾）い事、大に安心に存じい旨、歿後も相替らず、激勵して業を成しい樣に遺言致しい趣にい。

連日引切りなしの墓參、弔問客の接待に、忙がしさのうちにも、「春水行狀」の文に精力を傾け、三月十二日に脫稿して、杏坪の一覽を乞ひ、廿日はじめて理髮の上、歸裝をとゝのへ、廿一日改めて墓參の上、廿二日發船、竹原へ向ふ。

廿六日、岡山にて、姫井桃源を訪ひ、「行狀」を示して、それを資料に、墓地へ埋藏の「墓誌銘」執筆の事を求め、四月三日に歸京した。

その四、文政二年　吉野山・第四歸省

文政二年（四十歳）二月四日九州より廣島着早々、母梅颺（六十歳）に侍して歸京と共に、吉野の花へ案内したいと、廿三日、出立を急ぎ、その和歌の友立芥屋映雪尼を伴うて出立、竹原へ立寄り、春風の養子尙平（小園）も加はり、尾道では、灰屋吉兵衛（橋本竹下）・油屋松太郎（龜山夢研）・金屋幾右衛門（熊谷挹翠）の外、茶山の友人（道士役牛海）・醫北村屯泰（夢嶽）等に迎へられ、淨土寺・西國寺見物の上、神邊に入り、茶山を訪うて、九州のみやげ話をしたが、茶山は後にその隨筆『筆のすさび』に、いろ〳〵書き入れた。席上、「こんなめづらしい短冊があつた」と取り出して見せたのは、春水から贈られてゐた。

彌生ごろは、花なき里も、匂ふらん、吉野・はつせの、風を傳へて。

山陽が塾を去つたあと、今では志摩的屋の北條讓四郎（霞亭）が、代講を勤めてゐたが、折から歸鄕中であつた。茶山は、

旅立も、たちないそぎそ、老が身は、またあふことも、末しらぬ世に。

三十日まで、ゆつくり逗留して、吉備津宮から、ゆる〳〵播州巡りの上、兵庫より尼ケ崎に舟を着け、大坂滯在の上、山陽は京へ、母はそのまゝ居殘り、十九日に入京した。

その間に町中では面白からずと、二條木屋町下ル賀茂川べり、柴屋長次郎の座敷を借り受け、梨影とも〳〵車屋町から引移つたところへ、母は迎へられて、

高どのに登りてみれば、ひがし山、一目にみえ、ひえの山も見ゆ。夜は、ふし待月いで て川にうつり、水の音おかしく、千鳥しば〳〵鳴く。

とよろこんだ。山陽は、晩酌の頃、一日中の見晴らしが好いから、暮近い景色をそのまゝ「山紫水明處」と稱へてゐたが、後に三本木へ移つてからも、この名はかへなかつた。

けふ廿一日は東寺花供養から壬生の牛祭、母の所望で島原の三文字屋を見物した。

嵐山から、北野・平野の夜ざくらもすませて、廿八日、一行は吉野へ向ひ、奈良・初瀨見物の上、山へ着いて、さこ屋（芳雲館）へ宿つたのは、四月三日、花には少々遲れてゐた。

一目千本でも雨が降つたが、母は「さすが花の所なれば、咲殘りたるも、數ふるにいとまなし」と、筆には花を持たせてゐた。

當麻寺から、法隆寺・龍田へ、大和めぐりの上、十三峠に一泊、大坂へ廻り、四天王寺か

ら道頓堀の芝居を見物して、八日に歸京した。

それから連日、名所見物、小石・金山・雲華・香川景樹・月峯等の人々と往來して、閏四月六日には大津に入り、石山・三井寺あたり見物、宇治の螢狩まで、入京以來五十日目には母は伏見から大坂へ下つた。

十六日に、飯岡家で落合ひ、今橋・淀屋橋筋の中井家（竹山の子七郎・抑樓）を始め、同じく緣家の越智文平（高洲）を訪ひ、中の芝居見物の上、小竹の催しにて、住吉の舟行きから堺へ廻り、廿日、門人後藤松陰の計らひで、尼ケ崎へ出で、西ノ宮に一泊、ずつと母を廣島へ送り、岡山にて小原梅坡・神邊の茶山宅では、霞亭と對面、西條の春水門人脇典二（默齋）に迎へられ、海田市を經て、歸藩したのは廿九日、梅颸は往復九十六日目であつた。

五月六日、山陽出船。岡山から、舊友中村元三郎（嵩洲）と同伴、西大寺に遊び、新築石門の碑文を書して、河本の戸川家へ招かれ、嵩洲と別れて、備中の長尾蘇庵・宮內の眞野竹堂を訪ひ、同地龜山德右衞門（北翁）の案內で、岡山へ還り、旭川を美作に入り、備中松山（高梁）に、藩儒奧田樂山に迎へられて、正善寺の詩會に臨み、折から中元（七月十六日）の舟遊びに同行して、岡山へ引返し、歸京したのは八月十四日、昨年の京都出立からは五百

七十日目の大旅行は、こゝに終つてゐる。

その五、文政七年　第五歸省

次は、文政七年（四十五歳）二月廿三日、梅颸（六十五歳）が、廣島發船、京都へ向ふと聞き、三月早々、大坂へ下り待ち受けてゐたが、連日風雨のため、定めて船も遲れるであらうと心配しつゝ、後藤松陰の家（小竹の長女町子と新婚してゐた）で、その安否を氣遣つてゐたところへ、十三日に母は到着して、土佐堀の旅館八百長へ宿を取つた。岡田半江から到來の肴で一酌。十五日の夜舟で伏見に着き、今度は一昨年の冬至（十一月九日）に、木屋町から移つてゐた東三本木丸太橋西詰上ル新宅（水西莊）へ案內。村瀨藤城が折しも在塾してゐた。

翌日、辰藏（五つ）を連れて嵐山へ、梅颸は、始めて見た孫を抱くようにして、合駕に乘せ、嵯峨・渡月橋の三軒屋に宿り、翌日、歸宅。十八日は隈町の森荊田を伴ひ、梨影とともに、知恩院山門下の櫻馬場にて花見。十九日には、母に侍して、大倉笠山夫妻（袖蘭）を伴ひ、北野・平野へ同じく。廿二日、小原梅坡を迎へて、荊田・春琴・笠山夫妻の外、國元から來てゐる身寄りの塾生天野俊平と共に小宴を催し、廿四日は、梨影にお供させて、御所拜

觀の上、程近き金山重左衞門の外、小石家を訪はせた。四月三日、三條小橋の柏葉亭へ、梨影ともに會食して、「魚を呼んで、未だ到らず、杯を洗いで坐す。坐して看る、斜陽の柳梢に昇るを」と吟じた。茶山はそれを見て、「昔、游學時代にはその邊に寄宿してゐて、柳は一切切り拂はれたが、その後、また植ゑつぎしたと見える、三十幾年も昔の事で、なつかしい氣がする」といつた。

四日、梨影・辰藏の外に、塾生、備中高松・竹井重藏（秀桂）のお供で、高瀬川を伏見から下坂。翌日、日本橋北詰・桝市に宿を取り、山小橋の龍淵寺に、飯岡家の展墓のあと、道頓堀開發の家、安井九兵衞の案内にて、翌日は、角の芝居を見物した。座頭が梅颸ひいきの中村梅玉（三代目加賀屋歌右衞門）が、由良之助・師直・勘平三役の早替りと、梶原源太に、梅ケ枝は澤村國太郎がつとめた。梅玉は翌年一世一代の名殘りで舞臺をやめ、狂言作者金澤龍玉と名のつてゐた。その時、山陽は卽吟の詩を與へ、梅玉は、

ひらかせる、筆のいなづま、墨の雲、おとに聞えし、らいをいたゞく。

と、扇子にしたゝめたのを、やがて母の手元へ送つた。

七日、松陰催しの木津川口の舟遊びに、難波橋の生洲で小酌の上、川口から心齋橋に舟を

つけ、順慶町から新町砂場の夜店を見た。砂場を西へ曲つたあたりに、母の里方があつたが、今では義齋から四代目の、恭齋（重次郎、十一歳）が、さびしく生きのこつてゐるだけであつた。

八日、辰藏へのみやげに、高麗橋の名物・とらや饅頭をもとめ、越智（近江町、今内淡路町）・中井及び飯岡へ親類廻りの上、卯月八日の堀江あみだ池和光寺に、「甘茶」の供養に參詣の上、夜舟で歸京した。

廿一日、趣味の友、木屋八十八（青木木米）來訪、煎茶の急須を贈らる。

廿二日、笠山同伴、石山に遊び、瀨田大橋の舟遊びを兼ね、膳所の奥村柳庵（菅次――錫の名工）を訪ふ。

五月五日、端午、子又藏（後又二郎・支峰・二つ）の初節句に、亡父の遺墨を掛けて內宴。母は、夜に入り、下御靈から、革堂へ。

十一日、笠山同伴、宇治へ螢狩。翌日は、伏見・豐後橋にて網打。やがて梅颸より、萩藩邸の先代毛利齊房侯の後室春曦夫人へ螢を獻上。夫人は、有栖川宮織仁の王女榮宮・幸子と申し、山陽に書道の敎へを受けてゐられた。

廿八日、「講釋、『詩經』なり、此中より始める」とあり、梅颸は、五經の復習をしてやつ

た昔を憶ひ、深い感想を呼び起したであらう。

その夜は、三本木の貸席（龜松）の、「舞ざらへ」へ山陽・笠山の兩夫妻に、國元から入京してゐた聿庵妻皐子の姉・寺川絹子をも誘うて往つた。

六月十日、能登七尾から來てゐた門人、岩城清五郎（西皐）の催しに、柏葉亭へ。

十四日、梅颸、寺町三條の書肆・山田茂助宅へ、祇園祭の山鉾見物。

十七日、三條繩手・大和橋の木米宅へ招かる。

廿日、梅颸・絹子は因幡藥師の芝居へ、前狂言は、四代目歌右衛門（翫雀）一座の「葛の葉」であつた。

廿一日、景樹を招く、「（岡崎へ）歸る時、はや東じらみになり、家内のねる時、からす啼く。」母はその門人。招待の時には、いつとても徹夜が多かつた。

廿三日、土用入、小竹に招かれ、夜舟にて下坂。翌日、木津川口から、舟を大川に戻し、難波橋の花火見物。小竹の外、その妻田島氏さち子・實弟幸右衛門（平野耕庵）、及び武内確齋・後藤松陰同伴。廿五日、天滿宮夏祭、舟渡り神事を見物。廿九日、歸京。

七月十五日、中元。御所の御燈籠。「承明門の通、紫宸殿、御とうろうは、大びさしと申

七、倪法・夏山隱栖の圖幅　文政七年夏（四十五歳）

山陽の餘技として、尤も世に稱せらるゝは、南畫の山水に在り。この幅寫すところ、元の大家倪雲林の側筆法に仿ひ、

「研餘の焦墨、手、方に閑なり。試みに、倪家側筆の山を學ぶ。奈んともするなし、雲林の眞面目、本來、點皴の間に在らず。甲申夏日、寫し、幷びに題す。襄。」（大阪・中八治氏所藏）

すあたり、遠目にて。」

八月十八日、景樹を招く。「話多く、歌はあまり出來ず。雞鳴ごろ去る。」

月くらき、山陰なりし、我里も、見えわたる迄、夜はふけにけり。

閏八月十六日にも又。「例の長座、明ぼしの高くあがるころ迄。松茸・はも吸物・鮒さしみ・(鯛)あら吸物・あひる、其の外、内料理のもの四五種。」

すむ月に、水のこゝろも、通ふらし、高くなりゆく、波の音かな(景)

たらちねを、みやこに留し、かひありて、加はる秋の、月は晴れけり(山)

九月十五日、門人・伊豫西條・木村幾右衞門(力山)の催しにて、夫妻とも上鴨沙河へ。「細香同伴、歸り雨ふり、かさ・釣灯借り、ぬれ〳〵歸る。」細香の句に、「市燈、未だ點ぜず、長堤(鴨川東岸)暗し。同傘、歸り來る、此の際の情。」

十八日、春琴・笠山夫妻・中林竹洞、及び細香同伴、梨影も伴はれ、小石宅に落合ひ、九人同行、高雄へ紅葉狩、もみぢ茶屋一泊。山陽は、

たかを山、よるのにしきを、かさね着て、母とぬる夜は、ふるさとのつと。

十九日、槇ノ尾・栂ノ尾へ、高山寺にて書畫合作。笠山・竹洞は妙心寺へ。一行は清瀧川

ぞひに菩提の瀑へ、今宮にて一酌、歸宅。

廿日、常陸取手在の豪農海老原喜右衞門、金ぴら參りの歸途、その師市河米庵の紹介にて來見、「昨日は御不在に參上、失禮仕りました。老父たつてのお願ひで、先生の御書跡を頂きたく存じます。」「(これは〳〵、遠方のところ、高雄へ參りまして。私どもの書を、何か御役にも立つまじきなれど、御望なれば何なりとも認めませう。私も國元より母人上り居りまして、〳〵何かよろこばせたく、日々存じて居ります。親をよろこばしめるは、その好みの品より外には之れなく、さゝ何なりともお出しなされ)と、先生、至極の御機嫌にて、少し眼中に涙をさへふくまれた。」また、「親を大切に存ぜられい孝德拜見申い。一體、先生筆惜みと、世上の俗人に申されい程の人に御座い由は、米庵申いところ、右の始末に御座い。」

それで、喜右衞門は、肴代百匹を包み、書畫帖尺三の紙と扇子二柄を出したのをみて、「もつと大きいのを持參なされ」との事に走り廻り、四尺の絹本をとゝのへ持參すると、「親御の號は」と尋ねられ、「元は蔡葭亭と申すを、近ごろ米庵、聽濤軒と名づけられい」といへば、「爲書きでなければ、有りふれしものと同樣ゆゑ、書入れませう」、又、「明日は母人の供いたし、後白河法皇以來の御再興にて、仙洞御所樣(光格天皇)、東山修學院御幸拜見仕りま

す、そのもともいかゞや」と申されたと、父小左衛門への手紙にしたゝめてゐる（以上、手紙の文引用）。

その一幅には、この春、下坂、梅颸を待ち佗びた時の詩を書いて與へた。

この夜、梅颸は梨影と共に、塾生・河内國分の柘植卓馬（葛城）が案内して、御幸拜觀の家へ往く。

雲華も、手紙で拜觀のつてを頼みに來た。その返書に、僧形ではむつかしい、衣裳を改め、かづらでもつけてと注意して、場所は何處へなりと頼みませうといつた。小竹も入京して、くはしい記錄を書いてゐる。

廿一日、「豐榮のぼる日、長閑なり。」「御幸、日出でゝ、五つ（八時）前どもならんかし、拜見の家、東側にて、（鳳輦の）御簾に日かゞやき、御影も見えず。西側にて拜見の人は、御影拜みしといふ。」

十月二日、梅颸、留別として景樹を招き、三更過ぎて歸る。當夜は「つぐみ五羽・燒鴨芹やき・蕪ふろ吹・蒲鉾・雲丹・小魚蒲燒・からしあへ・慈姑」といふ献立であつた。

五日、笠山夫妻・細香主催の餞別會。柏葉亭にて、樫園・春琴同席。翌日、返禮として、

自宅にて留別會が催された。

七日、梅颸（滯留二百廿六日）、夜舟にて出立、山陽附添。八日、大坂大川町尾道屋に入り、小竹・松陰等の外、醫齋藤方策（九和）來り別る。西宮一泊。

十五日、神邊に入り、茶山宅では、東坡「前赤壁」の記念會が開かれ、出雲平田報恩寺の詩僧道光（聽松）も來會した。

廿四日、廣島歸着。十一月六日、出立、山陽は、

花もみせつ、もみぢも見せつ、我が母に、わかれてかへる、雪ふらぬまに。

松子山、まつ子はあれど、かさなれる、は山しげ山、こえぞわづらふ。

十二月十八日、姫路着。藩老職河合隼之助（寸翁）に迎へられ、その經營してゐる城外阿保山の仁壽山學問所に入り、講席を開く。學問所は、文政四年正月の創立に係る。

是より先、或人への手紙に、

家老河合隼之助より請待申し來りいて、にえたゝせ（興隆するようにして）くれといふ事、伊丹劍菱を寄せ置かれ、鯛の新らしきは喰次第といふ、ウマキ事のみ申越しい。

廿七日、大坂。第四十五回の誕生日。小竹宅に入る。「聞く、君今日、此の地に產ると。

初度、吾れに比して、百日先だつ。」――小竹の實父は豐後八坂出身の醫加藤吉翁。山陽の生れた翌天明元年四月十四日に生れ（京町堀川兩國橋北詰）、一歳の弟として、實は百八日後れてゐるだけであつた。

途上、「攝州歌」を作り「阿吉（吉法師信長）、肯へて人（荒木村重）に與へず（伊丹）。阿藤（藤吉郎秀吉）、宅を營んで、城、錦の如し。」今わが瓢には、まだ「劍菱」が少々殘つてゐる、御兩人に一杯進上しませうといふ。それを聞いて、釀造元の坂上勘三郎（桐陰）が、「それは私方の大記念物として、御筆蹟を頂きたいといつたのが、山陽と劍菱（坂上）との最初のつながりになつた。

廿八日、歸京、前後通じて、三百七日間の大旅行であつた。歸つた父の顏を見た辰藏の、

稚子、門に竢つて、我を迎へて問へり。　阿婆、何ぞ爺に伴はれて歸らざりしと。

いふことばを假りて、その情趣が、得意の家庭詩の上に溢れてゐる。

その六、文政八年　和歌山・廣島　第六歸省

文政八年（四十六歳）三月廿八日、辰藏天死（六つ）、千本・綾小路・光林寺に葬り（智香童子）、墓碑を立てたが、後に天保三年、山陽自身の葬式も、當時の寺法により、一旦この寺で行はれ、尙、假りに「山紫水明居士」の法號を用ゐて、それを辰藏の碑石に追刻し、遺骸は、東山長樂寺の山上に葬られた。

愛兒の喪に閉された日頃の鬱散に和歌山行を思ひ立ち、四月十九日、雲華をさそひ、柘植葛城を從へ、大坂にて廣島出の鐵商隅廣雄輔宅に入り、小竹の外、篆刻家阿部良山の子縑洲を伴ひ、堺に宿つたとき、小竹が一旦同行を斷つて、無理におびき出されたところから、旅宿をそつと拔け出したのを、宿の女將は、この夜ふけに、表戸の怪しい物音と、どろ棒に取り違へられたといふ旅のしくじりを演じた。山陽は、それを詩にして、「店姥、其の狀を怪しみ。大聲、同侶を警む。操觚の客たるを知らずして。認めて擔囊の虜（盜賊）となす」と戲れた。

岸和田にては、門人岸長太郎（琴泉）の家に入り、和歌山にては野呂介石（七十五歳）を訪うて、試みに山水を描き、その手法を質せば、介石も同じく一うねりの山を寫して見せた上、「古渡りの好い唐紙をお持ちなら送つて下さい、いくらでもかいて進じます」といふ、小竹は「私方には亡父三島の遺しておきましたのが、たくさんございます」と、其の後、その紙を送つたが、介石はいろ〳〵筆を染めて、送り返したのを、小竹は一枚も山陽へは渡さ

なかつたといふ。

介石は席上、山陽の畫才を認め、以後、自身の畫には山陽の題賛を求めることになつたのは、竹田が「我が畫には、山陽以外に賛するを許さず」といつたのと、よく似た話であつた。竹田も又、これより先、文化八年、介石を訪ひ、畫法を發明するところが多かつたといつてゐる。

和歌ノ浦のけしきには失望して、母へ、

聞きしにまさる面白からざる處にゐ。たとへば竹原の明神の濱を、民家・漁村・鹽田等にて、ムチヤクチヤにきたなく致ゐ樣のものに御座ゐ。

紀三井寺は、（廣島ならば）的場の方角に當りゐ。

よくも母上樣、（御上京の節）御出でなくしてよろしく御座ゐ。

歸り路には、泉州から金剛山を望み、七古長篇の作があつた。廿八日、歸京の上、旅行中の詩畫を一帖にして、「南遊息翼」と小竹が題字を書いた。

ことし八月廿二日、姫路へ向ひ出立、中津の門人野本大次郎（猟庵）と、柘植葛城を從へ、途上、攝津櫻井の楠公父子訣別の舊跡に、七言古詩を作り、姫路に入つて、仁壽山學問所督

學大河原新彌（尙賢）に迎へられて、講席を開いてゐるうち、春風（九月十二日歿、七十三歳）の訃音に接し、十月四日竹原に入り、照蓮寺墓參の上、六日、廣島へ歸省。十一月出立、十三日、尾道にて、九州歸りの梁川星巖（卅六歳）夫妻（紅蘭）に出逢ひ、十五日、神邊にて、茶山催しの詩會（東坡後赤壁の記念）に列し、姫路へ引返して、歸京したのは廿九日であつた。

二三、歸省と遊覽（下）

その七、文政十年　吉野山（再び）

次は、花期におくれた吉野の見直しに、又も母を迎へた物語は、「歸省」ではなかつたが、その後日譚として、こゝに順序づける。

春水の歿後、早や十二年、ことし文政十年（梅颸六十八歳・山陽四十八歳）の二月十九日、母はその忌祭を終つて、景讓が遺腹の忘れ形見三千三（達堂、十三歳）の手を引き、卽日杏坪（七十二歳）・（賴）立齋の外に、尾道から、山陽名代として迎へに下つた宮原健藏（節庵・廿二歳）に、若黨手島三五（伊助の子）、杏坪には同大藏・久藏の供にて、一行八人が廣島

を夜中に出船した。山陽は、三月一日、出迎へのため下坂してゐる。

一行は、尾道から陸路、その日、兵庫に入り、楠公の墓碑・生田宮あたりを歩いて、夕刻恰かも着坂した。

二日、小竹・松陰と共に、大川に舟を泛べた。杏坪は、以前山陽を伴ひ、江戸から歸る途中で出會つてから、早や三十年目になつてゐる。

五日、伏見稲荷宮參拜、正午に三本木へ着いた。支峰（五つ）、その弟三木八郎（三樹）（八年五月廿六日生れ、三つ）が、嬉々とよろこんで、小さい手を玄關に突く、長兄辰藏が同年三月廿八日に亡くなつてゐたゞけが寂しかつたが、その年五月廿六日、三樹が生まれたので、父は「算用の取り戻しだ」といつた。

嵐山をすませて、十八日、一行は吉野へ向ひ——節庵と——廿日に山に入り、前のさこ屋に泊つて、すぐに一目千本へ急いでみると、今正に爛漫と花は笑みかけて、一行を迎へた。

梅颸は、

いのちこそ、うれしかりけれ、老てのち、ふたゝび見つる、みよしのゝ花。
吉野山、くもゝうらみも、晴にけり、花はさかりの、春にあひつゝ。

六田ノ渡しで降つてゐた春さめも、こゝでは雲がとぎれてゐたところを、ふところ紙に寫生した。杏坪は、山陽を振り返つて、

あはれ汝が、また枝折して、たらちねの、まだみぬ花を、み吉野の山。

山陽は、胸なでおろして、それをよろこび、「母上の御滿足を見てうれしく、天下の宰相になるよりも」といつた。その嬉しさを留守する聿庵にも分けてやりたいと、二ひら三片、押し花にして、詩とともに手紙の中へ封入した——「尺書、併せて天涯に寄せ去る。憐れむ、汝まさに春に當つて、猶家を守るなるべし。」

翌日も、雨後晴れ、野辨當を宿から取寄せ、竹林院の芝生にて一酌。又も千本の花に夜をふかし、提燈の明りで歸宿した。

後に、門人森田謙藏（節齋）は、支峯（廿七歳）が、江戸遊學送別の文に、

子もまた速かにその業を成し、令慈（梨影）を奉じて、以て先蹤を追へよ。余は大和（五條）の人なり、余まさに前行して、これを「香雲暖かなる」處に導かんとす、子其れこれを勉めよ。

歸りには、多武峯・長谷寺から、奈良・宇治へ廻り、廿五日に歸京した。翌日は、知恩院

の花見、雲華・奥劣齋・大堀正輔も來り、門人・加賀大聖寺の兒玉三郎（旗山）がお供した。

廿八日、北野・平野の花。雲華・樫園・春琴・笠山夫妻の外、細香及び江戸・大槻平次（磐溪――磐里の子、九州行の途中）等、一行すべて十八名。

翌日は、また知恩院へ。梨影も二兒を連れ、山陽は景樹を連れ出した。景樹、

咲花も、春をさかりと、思ふらし、けふこゝろある、人を待ち得て。

山陽は又、母の歌道の先輩、瀧原宋閑を引き出さうとしたが、同行しなかつた。

四月四日、梅颸は、おなじく鈴木連胤宅へ招かれ、途中、宋閑を誘つた。

八日は、一乘寺の詩仙堂へ。十一日、湖南遊覽。

廿六日、杏坪は、山陽・雲華同道、權大納言日野資愛卿（南洞）に招かれた。山陽は、以前からたび〳〵參邸してゐる。

廿九日、山陽・立齋は同伴にて、高雄山へ、長府の小田南畧も來合はせ、廣澤の池では、雲華・樫園、及び葛城と落ち合ひ、翌日は、嵯峨・嵐山へ廻つて歸宅。

五月一日、杏坪、所司代水野越前守忠邦（濱松藩主）に招かる。

三日、三木本いばらきや（清輝樓）にて留別の宴。樫園・春琴・雲華・竹洞・笠山夫妻の

外、立齋・達堂、及び旗山も出席した。

六日、景樹を訪ひ、杏坪から託してあつた「十旬花月帖」の中へ、歌を書かせて取り歸つた。この帖は、七十日間の暇をもらひ、國元から携へて來たもので、旅行中それへ諸家の書畫を書き込ませてゐた。

八日、柏葉亭にて見送りの人々と別杯の上、高瀨川を伏見へ出で、山陽は節庵の外天野俊平を伴ひ、翌日、下坂して、直ちに有馬へ向ふ。杏坪は、この湯治が旅の目的でゞもあつた。

十二日出立、伊丹の坂上家を訪うて西下、山陽は節庵を供に、今度は附添が多かつたから、こゝで立別れた、一行の歸藩は、廿二日であつた。

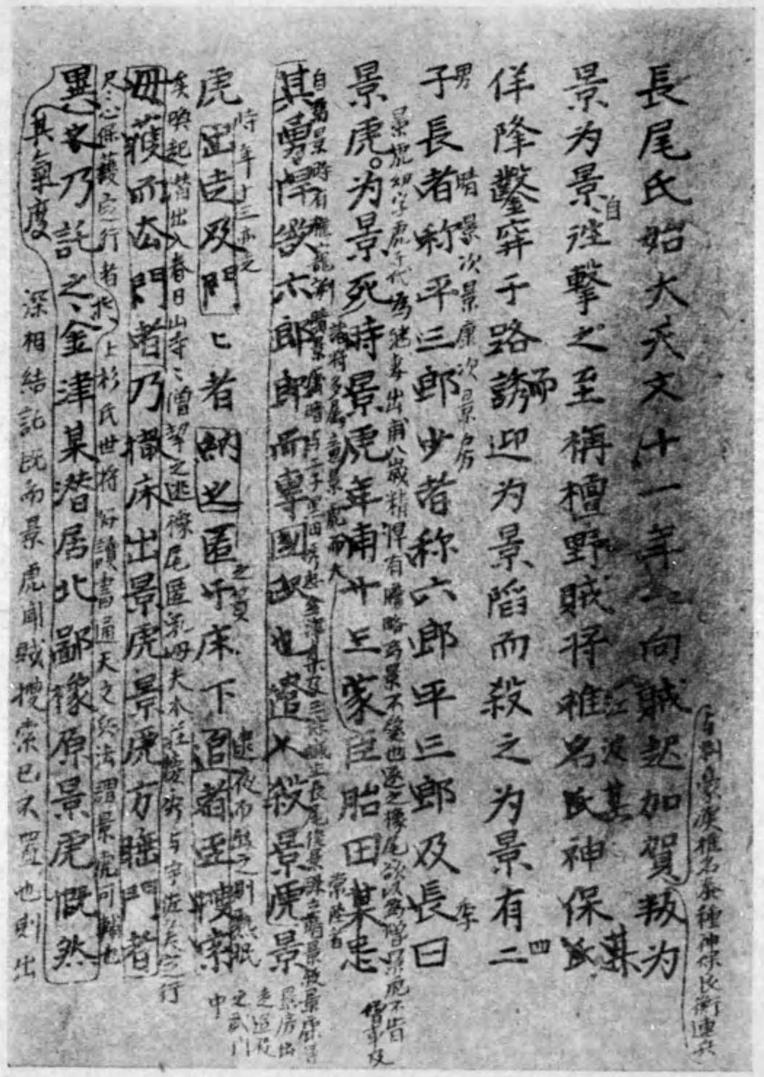
その八、伊勢參宮・箕面觀楓

『日本外史』が、大體初稿の出來上つた後、こゝに二十二三年間、大修正を加へつゝ、ことし文政十年には、その手を離れ、論贊も同時に完成して、さて出版の一段となり、又一苦勞が、そこに横はつてゐた。これは、うつかり世の中へは出せない、幕府政治を呪うた著述は、十二分の手をつくさない限りは、と廣島のお客を迎へつゝも、連日連夜、心を碎き、江戸の諸友・市河米庵を隨一に、幕府直轄の聖堂に取入るべく、林大學頭の諒解でも得て置きたい

と、いろ〳〵その手をつくしてゐた所へ、一行の出立と、けぬき合はせに、思ひもよらない福音が天の一方から、老中の隱居（松平樂翁侯）が、今は桑名藩に當主定邦侯が移封され、徳川家齊將軍が太政大臣兼任の大命を受け、そのよろこびの御使者の一員として上京の機會に、外史所望の旨を授けられ、京都の藩邸の用達（齋藤節翁）を使者とした。

その訪問を迎へた山陽は、「それをこちらからの献上ではなしに、お需めになら、よろこんで差上げます」と念を押し、そこでいよ〳〵その手續きを了り、「樂翁公に上つる書」を添へて、寫本廿四卷が「桑名文庫」に納められ、その挨拶として、老侯編纂の『集古十種』全部二函の美々しき大冊に、白銀二十枚を添へて贈られ、その謝狀を、年來文通の侍臣田内主税（月堂）の手元まで送つたのが、その年の閏六月廿九日であつた。ことし文政十二年（五十歳）の正月に至り、老侯の題辭さへ出來てゐるのであつた。

國元では春水十三回忌に當り、親しく墓參をかねて、いろ〳〵その樂しい歸省に心はいそぎ、二月早々、出立して、十四日には、先づ備後三次の郡奉行所に杏坪をたづね、その子采眞の入藩に同行して、廣島に歸着したのが十八日であつた。翌日の祭奠に、比治山への墓參に、報告した追孝の心情には、どれだけ亡き父が、（更に老健なる母も）うれしく感受した



八、『日本外史』の修正稿本　一部上杉氏の條

文化四年（廿八歳）、外史の初稿本成りて後、文政十年（四十八歳）に至るまで、年々その字句の大修正を加へ、朱・藍・墨・胡粉を用ゐ、最後に附箋を施すに至るまで、その心力を盡くし、ことし、松平樂翁侯の求により納本せしものも、この修正本を謄寫せしめたるなり。（備中笠岡・生長家所藏）

であらう。

三月七日、又も母（七十歳）を奉じて歸京の船を尾道から上陸。十七日歸坂して、翌朝は嵐山へ廻り、梨影は二兒を連れて、櫻園夫妻（優子―月枝）と同道に出迎へた。御室から平野の花へも見巡り、十九日の晝過、三本木へ歸着した。

この度の旅行は、先づ皇大神宮の參拜を目的に、門人節庵・華頂宮御附―名古屋の大八木靜齋を伴ひ、廿五日出立、三條蹴上の立場茶屋で見送人と立別れ、「妻を携へ、子を挈げて、同じく母に隨ふ。是れ流民に非ず、是れ逸民」と吟じ、梨影は支峰（七つ）の手を引いて隨ひ行く。天下の逸民――處士の身に、それが如何に誇らしくも、また樂しい首途であつたことよ。

廿六日、鈴鹿峠を越ゆる頃より、「間の土山」は雨になり、十六年前、美濃方面から歸京の時、こゝで大雪に出逢つたことを偲び、坂下一泊、松坂の本陣から、川崎舟にて、二見浦の角屋に宿り、廿九日、さしのぼる朝日影を浴びて、梅颸、

あけぬまに、あら磯岩根、ふみわけて、二見の浦の、いづる日をみる。

皇大神宮に參謁して、五十鈴の川水に口すゝぎして、

平地、雲氣を生じ。天に横はつて、木陰を疊む。萬年、神在ます處。兆庶が、子來心。
此の水、今古に流れ。何人か、淺深を測らん。姦雄（不忠の臣）、裔冑（萬世一系の天子）を欺かば。遁れず、太陽の臨むを。

この夜は妙見町の藤屋に一泊。明けて四月一日、豐受大神宮を拜し、上ノ窪に、山口覺太夫（韓聯玉・凹巷）を訪ひ、梅颸は松坂へ先着。長野・島ケ原を經て、四日には笠置山。大倉笠山は歸鄉して、こゝに一行を迎へた。

翌日、木津の柴舟に、淀へ向ひ、舟中、「笠置山」の詠史を腹稿した。夜に入つて歸京。

廿三日、宇治を經て、翌日着坂、淀屋橋の備前屋に投じ、小竹・松陰と共に、岡田半江を訪ひ、廿五日、小竹・半江同伴、岸和田に入り、廿八日、夕陽丘・淨春寺（梅颸の父義齋の先配・柳子の墓）と龍淵寺に展墓、松陰催しの石町三橋樓に一酌して出立、廿九日歸京した。

五月六日、大津に遊び、翌日歸京。

八日、日野南洞公來臨。夜に入つて、折からの「螢」に興じ、山陽と分韵の詩を作り、梅颸は、

君のため、やどの軒端の、さし柳、さしもしげみに、飛ぶほたる哉。

軒端の柳は、主人の手植であつた。十三日、公は謝狀に添へて、

水ちかく、山遠からぬ、この宿に、いつか隣は、しめて住むべき。

廿四日、松崎慊堂門人・鹽谷甲藏（岩陰・廿一歳）、岡山行の途、初めて來塾。

この日、下坂。翌日、堂島川・佐賀藩藏屋敷の草場珮川に迎へられ、小竹同伴、天滿宮舟渡り祭禮を見物。翌日、昨年十二月脫稿の『日本樂府』を、難波橋の宿傢屋へ、翌日も來訪した田能村竹田（子如仙及び門人高橋草坪—廿六歳—を伴ひ、京町堀紀伊國橋・同鄉芸香堂綿屋文作の家に滯在中）に示したが、やがて讀評を附して返送して來た。

廿七日、竹田・松陰及び坂上桐陰の見送りに、八軒屋で別れて歸京した。

秋に入り、大津の諸藩用達岩崎喜助（鷗雨）に招かれ、節庵の供にて、湖上仲秋の月を玩び、梅颸、「觀月紀行」を作る。（この卷は私の亡友・大垣の金森毅庵の所藏であつた。）翌日歸京。

九月六日、津藩教授齋藤德藏・拙堂（卅三歳）來見。

十五日、雲華の招きに、朱雀の丹波屋にて一酌。梅颸は途中錦小路で、針の療治に隙どつた。その案内に應じた時の手紙に、

今日、關ケ原の日にい。（只今）黒田と、（石田の謀將）島左近（勝猛）、せり合ひい時分にい。松尾山（小早川陣）へ、大筒を放ちかけい比（正午前）には、私、瓢たんにて出かけ申すべくい。

かういふ手紙をよこされては、雲華も、一寸その時刻の勘定に面喰つたかも知れない。

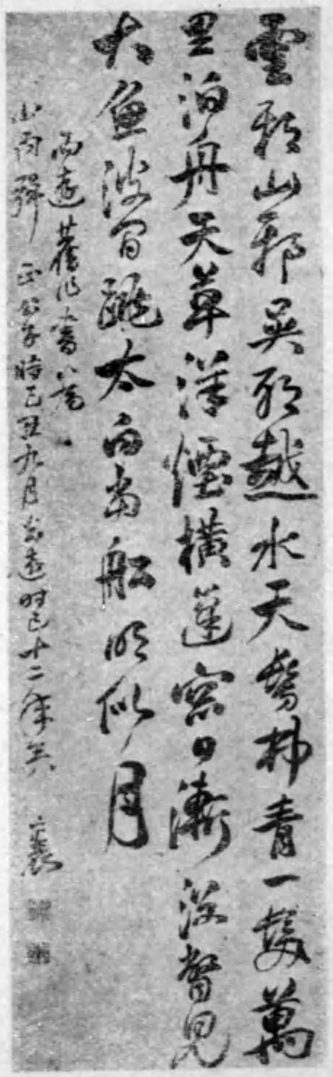
十月五日、この日より、又々『外史』の再校に着手（十九日終了）――姫路藩よりの求めに應じ、十二月に入り納本となつてゐる。十四日、島原藩儒川北喜左衞門（溫山・卅六歳）、江戸行の途中來見。『外史』校本を示されて、「東方赫々として、天明に屬す。但見る、葵心、日に向つて傾く」といふ句があつた。

廿日、立齋と共に母を送つて西下出立。入京以來、二百九日間であつた。梅颸、

老ぬれど、度かさなれば、わかれ路の、くるしきまでは、おもはざりけり。

これが梅颸一代最後の入京となつた。苦しき別れ路とは、歌識とでもいふ意味にとられて、うらさびしい氣もする。

廿一日、下坂、土佐堀肥後殿橋錢屋に入り、松陰同伴、舟にて城見物の上、中井家に一泊。翌日。小竹・松陰と共に、伊丹の坂上家に一泊、竹田は草坪を伴うて來會。廿三日、坂上桐



九、「天草洋」の詩幅

文政十二年九月（五十歳・同元年、卅九歳の詩）

文政元年九月一日、天草島に寄泊せし時の作を、後に土佐藩主山内豐資侯の弟彈正豐著の爲めに、習字手本として贈り、後その弟容堂侯の手に歸せり、書體の謹密なるは、その故に由り、特色を見るべきもの。

陰に導かれて、箕面山の紅葉狩を催ほす。

梅颿は大坂に生まれて、紅葉と瀑布の名勝はまだ見てゐなかつた、こゝろよげに、瀑のおもむきに眺め入つた折しも、一陣の山風に、紅よりも赤いもみぢ葉が颯と吹き拂はれ、秋の日かげに瀑水へ飛び交ふおもしろさに、一同手をたゝいて、その絶景に見入つた。山陽は、

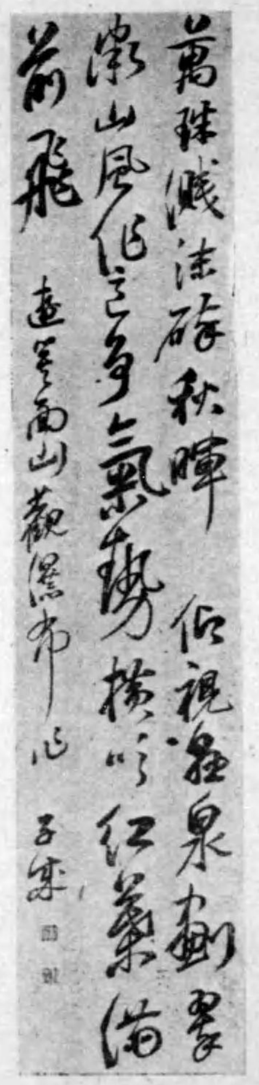
萬珠、沫を濺いで、秋暉に碎く。　仰ぎ視る、懸泉の翠微を劃するを。

作意、山風、氣勢を爭ひ。　横さまに、紅葉を吹いて、滿前に飛ぶ。

坂上家へ歸り、書畫の合作に夜をふかした。

その時の酒宴に、主人は近所の同業「清竹」の酒造家、鹿島屋利兵衞（岡田柿園）と、名からして柿にちなんだ、その家から貰ひ合はせてゐた大柿を、山陽は大の好物と貪ぼるように喰ひつくして、「こんなのはたべはじめだ、もう一つ欲しいが」といふと、主人はあたまをかいて、「これは私方の弟が、今津（灘）の方へ分家して、その庭から幾株も、こちらへ植ゑましたのが、大かた枯れまして、やつと一株だけ、この通り大きいのが出來ますが、何分たくさんは熟りませんので」といつた。

その跡で、主人はそつと竹田にむかひ、「けふの記念に、先生、一つ柿の畫をおかき下さ



一〇、箕面山觀瀑の詩幅　文政十二年十月（五十歳）

文政十二年の春、母梅颿に侍して、皇大神宮に參謁し、その冬廣島へ歸る途中、十月二十三日、田能村竹田・篠崎小竹・後藤松陰・高橋草坪を誘ひ、箕面山に遊び、觀瀑の際、恰も紅葉の秋風に紛飛するを見て詠じたる詩を書したるもの、蓋し當日、一行を案内したる伊丹剣菱醸造家坂上桐陰の宅に投宿せし時の揮毫に係るものなるべし。

昭和十五年の秋、吾等の發起にて、この詩碑を濕布の傍に建てし時摹刻したる原本は卽ち是れなり。その題して「孝養碑」といへるは梅颿が大坂に生れながら、老後の今日、未だこの絕勝を實見せざりし爲め、特に路を枉げて往觀し、母の歡心を得たるに由り、「紅葉」の晉通に取りて、かく呼びたるなり。『山陽遺稿』にはこの詩を逸す。（京都・上野清圃氏所藏）

いませんか」といはれて、醉筆を一なぐり、おまけに携帶の繪の具を持ち出し、着色念入りの柿が、うまさうに一つ描かれた。主人は大よろこびで、何やら一趣向ありげに押しいたゞいた。

歳明けて早々、坂上からの手紙に、「柿のお替りを差上げますが、何か御一筆を」と書いて來たのを見ると、竹田筆の大きなのが一つ、「己丑冬日戲筆。竹田生」と立派な落款、いつの間に畫いたのか、あの時の事は醉ひまぎれて全く知らなかつたがと、そのまゝにしておいたが、その後矢の催促に時候外れの秋の九月に「柿の記」を書いて送つた。

廿四日、晝前、梅颸・山陽出立。竹田・草坪は、それより池田・有馬に入り、小竹・松陰は神崎の渡しで別れ去つた。

此の行、竹田は、大坂を出はなれた時からの畫帖（目擊佳趣冊）を作り、特に瀑布の實景に意を用ゐたのが、木戸松菊侯の遺愛として、侯爵家の庫中に發見されたのを私は見知つてゐたが、最近、その詩幅を一見して詩碑の擧を思ひ立ち、箕面保勝會その他有志の手に、その竣成を見るに至り、それを「山陽孝養（紅葉）の碑」と題して、瀑布のほとりに建設され、またその碑材も偶然、溪中に物色されたことをよろこぶ。

十二月二日、梅颸を尾道まで送り屆くべく立齋に託して立別れた。梅颸一行は、海路、四日市に一泊。三日、歸邸した。廣島出立後、正に二百卅三日であつた。

山陽は、さきに耶馬溪にて、その大圖卷を作り、今又尾道・橋本竹下の爲めに、十二年前の舊蹤を顧み、別に又同じ圖卷を再寫し、更に詩九首を書き加へた。前者は今、近江・外村與左衞門氏に、後者は當主橋本龍三氏の家に傳へられ、私は先年、亡友內藤湖南博士と共に、氏の先代海鶴翁を訪ひ、始めてそれを一見したことを憶ひ出す。

十一日、山陽は尾道發船、廿八日、兵庫上陸、翌日、歸京した。

その九・十、最後の廣島行

天保元年（五十一歳）六月七日、梅颸の病狀を聞き、また〳〵歸省のため出立、門人備後關五郎（關藤藤陰・廿四歳）隨伴。十七日、笠岡着、藤陰は鞆津まで見送つて歸郷、山陽は竹原に入り、賴小園と同舟、廿二日、廣島に入る、母の疾は案外に重くはなかつた。

七月九日、自身風邪引籠りの折柄、去る二日、京都大地震の報告を、在京同郷の宮崎與三郎（木雞）から報告されたが、やがて梨影よりは、留守無事の便りがあつた。

廿八日、風邪全快、歸京出立、竹原から尾道に入り、節庵の父渡橋貞兵衞を訪ひ、八月六

日、歸京した。

藤陰は、四日、出立、尾道にて山陽歸京の事を聞き、そのまゝ廣島へ赴き、梅颿を見舞ひ、八月廿六日、塾へ歸つた。

山陽が地震の狂詩に、

搖り詰めて、頓と生きたる心地なし。　銘々、思ひ附く、咒詛事。
今春の御蔭（大神宮の御札が降り、えぢやないか唄を歌うて參宮）、始めて間に合ひ。
參宮の御札、頭に挿して寢る。
洛中、家並に普請連なる。　腰は强し、左官と手傳と。
地震、搖り罷んで、職人搖すり。　一人前に取る、二人前。

それは、細香の見舞狀に對する返書中に認められてゐる。

その翌二年（五十二歳）九月十六日、再び梅颿看病のため、門人日向延岡・白石靜齋（廿八歳）を伴ひ、出立西下、伏見の舟中、手紙を門人牧百峯へ宛て、整理中の『山陽詩鈔』出版の指圖を與へ、その完成を望んだ。

途中、神邊では、菅家を訪ふ、茶山歿して（十年八月十三日、八十歳）この方、五年の歳、

一一、『山陽詩鈔』製版の意匠

天保二年九月十六日（五十二歳・門人牧百峯に與ふる手紙）

天保二年九月十六日、歸省の途中、伏見の下り舟より發信せしもの。『詩鈔』の開版に對して、如何に意匠を費したるかを見るに足る。

（安藝廣島・山木信太郎氏所藏）

月は流れてゐる。今、こゝへ來て、在りし昔を憶ひ、當主三郎（自牧・茶山甥萬年の子・廿一歳）に會ひ、茶山の詩に次韻して、「老に垂んとして、未だ厚誼に酬ゆる能はず。微勞、纔に遺書を校するを得たり。」と吟じ、「先生詩集」の原稿につき、いさゝか校正のお手つだひをしたと言つた。

竹原では、來合はせてゐた杏坪と、照蓮寺にて對面、廿七年前（文化二年の秋）、こゝで茶山の來會した昔を語らひ、互にその詩を分韻した。

十月二日の夜、廣島に歸つたが、母（七十一歳）は何の異狀もなかつた。みやげとして差し出したのは、紬羽織地に、聿庵妻皐子（廿四歳）へ、びろうど衿、達堂（十六歳）へは唐墨、孫東三郎（誠軒・聿庵の子・二つ）へ、三木三郎ゆづりの岸縞單物、下男下女へは鳥目（小錢）二匁づゝであつた。

十四日、坂井百太郎（虎山・東派の子・廿一歳）來見、文稿の評正を求む。十五日、母に侍して宮島行、達堂隨伴。十六日、未明に渡海、達堂を神職棚橋將監（野坂梅園）へ遣はし、その梅林の別莊に迎へられ、翌日、大元の紅葉を見て、七浦めぐりの舟中、鰯網を見物、引返して社參の上、神庫の平家納經・重盛の鎧・大內義隆の甲冑、その他寶物一覽、詩を作つ

て揮毫の上庫內に納めた。又、

我れを抱いて、爺娘、海船を下り。　當時、襁負、龕前に拜す。

白頭の母子、重ねて來詣す。　存沒茫々たり、五十年。

憶ひ起せば、天明元年六月十五日、生後七ケ月にも滿たなかつた身が、兩親に抱かれて、この廣前にぬかづいてから、早や五むかしの歳月が流れ去つた。

十九日、歸つて本川より、四丁目の渡し場へ着いた。杏坪も程なく、竹原から、小園父子（來洲・十二歳）と同舟にて歸り、采眞も同席、會食した。廿二日、白島の杏坪邸へ迎へられ、廿九日には、木雞の催しにて、母に從ひ、達堂の外、尾道から來合はせた宮原節庵同伴、舟遊びに興じ、十一月三日、節庵を連れ、杏坪父子に見送られて、發船。

強ひて行杯（別杯）を舍て、拜訣して還る。　なんぞ能く、仰いで阿娘（母）の顏を視んや。　萬端の心緒、誰に憑つて語らん。　付與す、潮聲・櫓響の間。

虫の知らせとでもいはうか、この度のお別れには、母上のお顏も、まともには見上げられなかつた。私のこの心持は、たゞ浪や櫓の音にまぎらして居りますといつた。これが最後の永訣にならうとは誰か知るべき。

五日、尾道・橋本竹下を訪ひ、滯在中『日本樂府』を一卷に揮毫。十日出立の後、道中に明の吳應和の『浙西六家詩鈔』を讀み、一々細評を加へつゝ、姫路に入り、仁壽山にて講席を開き、舊友菅野眞齋・高橋恕介（倉山）と共に昔の思ひ出を語り、學問所督學近藤顧一郎（抑齋）・寸翁（在江戸）の子小太郎（屏山）等の接待を受け、十二月一日、出立、五日、道中から門人福山の江木繁太郎（鰐水）を從へて歸京した。

六日、なつかしい故郷の母へ、仁壽山では殿さま同樣、接待の手厚かつたことを述べ、この味噌、あなたさまの御好物とて、ひつこくいへども、十五萬石の御料理の品と、思召し下さいと手紙を添へ、又、

又二郎（支峯、九つ）、柳の茶屋より半道程、伏見の方へ迎へに參り、ショボ〳〵髮立ていて、見かへ申い。私、九歲の時（天明八年）、岩鼻へ先大人御迎に參りい時と同樣存じ出で、感愴仕い事に御座い。

また、杏坪の『春草堂詩鈔』開版につき、

白島大人の仰せ付けられい御用、それ〳〵大坂（小竹）にも相談仕り置きい。

その版下は、小竹の門人吳又兵衞（北渚）の筆に成つてゐる。

その十一、月瀨行

天保元年、津藩教授齋藤拙堂を月瀨へ始めて案内した、伊賀上野の服部右助（竹塢）は、更に梅林行をすゝめて來た。拙堂の『月瀨遊記』を添削して興味をそゝられても居たところであつた。二月廿一日、門人關藤藤陰を從へ、伏見の五ノ橋で、江戸の篆刻家細川林谷・門人宮原節庵、豐後橋で小石樗園・浦上春琴・小田百谷と落ち合ひ、笠置に一泊（雲華・竹田・小竹及び伊丹の坂上桐陰等も誘うたが不參）。奈良で古梅園主人松井墨樵も一行に加はり、忍辱山の寺内に休み、柳生一泊。廿三日、高尾に入ると、名張川べりは丁度花の見頃であつた。百香野を經て、月瀨の農家で中食、五月川に棹さして、一目千本の眺めに、坂上の贈つた劍菱で一酌。尾山の三學院に入り、「萬玉亭」といふ額を書き、印がないと困つてゐるのを、林谷が手早く、さつま芋のへたに、「山陽」の二字を彫つた。

廿四日、雨中、大河原から木津へ着き、柴舟で笠置へ還り、廿五日、木津川を淀へ出て歸京した。竹田への手紙に、

扨も〳〵梅は天下無双と申すべく、あれを見ねば、此の世に生まれて梅を談ずべからずい、同遊せざる事、返す〳〵も遺憾の甚だしきものにい。

竹田は、この春、大坂の醫（子如仙の師）松本醉古の爲めに、山水十景帖を畫き、月瀨行に誘はれて不參した言ひ分けやら、その畫帖の跋を賴むつもりで、三月十一日、大坂より上京、山陽を訪うたが、「知恩院の花見に」といはれて、櫻馬場の茶店で逢ひ、畫帖を渡して別れたが、山陽はそれを見て、「この傑作、人に渡すは殘念」と、「奪つて己れの有となす」「亦復一樂」と書いてすましてゐた。その畫帖には一景ごとに隱士樂意の理想境を寫し、一つ〳〵「亦復一樂」と竹田の自贊したことばを借用してゐる。

それと知つた竹田よりも、醉古の驚きは一方でなかつた。それを氣の毒と、別に又、十景帖を畫いてそれを償ひ、さて考へてみれば、それほど珍重してくれる山陽の心持がむしろ嬉しかつた。知己の爲めとて、その上又も三枚、山陽の趣味から考へて、白描の蘭竹・牡丹・梅花水仙の三圖を畫き足してそれを贈り、又改めて山陽の風流逸事を十二章に分けて、あべこべに自跋として書き添へ、それを斟斗の代りに進呈した上、尙も懲りずに、醉古に畫き與へた後の畫帖に、又その跋を賴んだ。山陽は笑つて直ぐに筆を執り、

竹田を煩はして、再びこの後帖の如きものを作つて、我れに與へ、再び前帖の如きを作つて、醉古に與へよ、

づけ〳〵と、さう書いて顎を撫でてゐた。世にこれを一樂帖の爭奪戰といふ。

それで話は譯なくすみ、山陽は三月十二日に竹田を嵐山へ誘ひ、又その下坂を送つて、淀の川舟で、携へて來た煎茶具一式を、歸鄕のみやげに贈つて別れたのが、終生の永訣となり了つたとは。

その十二、彥　根

天保三年（五十三歳）五月八日、彥根藩の老職・小野田小一郎（簡齋）に招かれ、門人關藤藤陰（廿六歳）を從へて出立。大津坂本町・岩崎鷄雨宅に一泊。翌日、舟を薩摩村に寄せ、門人中川祿郎（漁村）の家（水雲茅舍）を叩いて又一泊。漁村は、後に彥根藩主井伊直亮（なほあき）に仕へ、また掃部頭直弼に信任せられて、開國論を主張したといはれてゐる。

十日、漁村同伴、湖水を橫ぎり、彥根着。簡齋、及び遊寓中の梁川星巖に迎へられ、城中に講席を開いた。

十三日、簡齋の儘しに、星巖と同舟して、石田三成が佐和山の舊墟に登り、十四日また舟遊、大洞（おほほら）山に登り、寛政六年の昔、茶山が江戸歸りにこゝへ來て、詩を作つたことを憶ひ、星巖とともに、その韵を踏んで、唱和の作があつた。

滯在中、首席家老木俣土佐（石香）の爲めに、「石香齋の記」・簡齋の「簡齋の記」を撰書した。石香齋では、その九世の祖右京が朝鮮人から贈られし沈香の化石があつた。また井伊直孝に從ひ、大坂役に銃痕を留めた陣羽織、その他の遺品を展觀した。

十八日、出立、簡齋は舟を仕立てゝ見送つた、星巖の送別に、「日支崖外、一堆の碧。是れ汝が明朝、歸る處の山。」

この夜、風を避けて沖ノ島に舟を繫ぎ、漁村の携へてゐる明末の烈士傳『南疆繹史』を讀み、史可法の傳に至り、流涕大息、殆んど曉に及んだといつてゐる。翌日、大津から歸京、みやげの湖魚を肴に小酌した。

二四、大患中に著述の整理（上）

是れより先、四月、高槻の門人・藤井啓次郎（竹外、廿六歳）來見、恰も下坂の際、支崖の外、關藤藤陰と竹外を從へ、途中、その宅に休息して大坂に着。直ちに（東町奉行所與力職）大鹽平八郎中齋（連齋、後中齋、四十歳）を天滿川崎の宅に訪ふ、中齋は、その著『古本大學刮目・洗心洞箚記』などを示した。中齋、後に、「山陽は『刮目』の序文を作る考へがあつた」と云つてゐる。山陽は天保元年九月、中齋が名古屋の宗家へ赴く時、その送別の文を作り、大いに吏道の頽廢をなげき、中齋の功績を奬揚した。

その歳、中齋は西町奉行新見伊賀守正路の爲めに日本外史の寫本を求め、山陽の寄贈したのを謝して、大坂月山作の名刀を送り、こちらは詩を作つて、又これに答へた。正路は在職中、淀河疏水記念として、天保山を築き、公餘經史に通じて、藏書に富み、賜蘆文庫の名を留めた。

彦根から歸つて廿二日目、突發に喀血して、先づ門客の新宮涼庭（鬼國）の來診を求め、同じく小石元瑞・秋吉雲庵（雲桂）も引續き診察の結果は、肺血疾といふことに一致して、むつかしい必死の症と斷定され、まだ見込がありますといつたのは雲桂ひとりであつた。

『遼豕錄』の內の、『春秋臆斷』は、着手以來三年、今や進んで十二公の內、魯の「昭公」のところまで進んで筆を絕たねばならなかつた。あと「定公・哀公」で完成するので、「後世或は吾れを知るものあらば、十を以て二を推す、何ぞ難からんや」といつた。

『山陽詩鈔』は大方出來上り、『書後』（經・史その他）・『題跋』（主として書畫）は、門人兒山旗山に託してあつた。その外、詩文の大改刪は殆んどそのすべてに亘つてゐた、他日『遺稿』編輯の時の原本として。

十六日、雲桂へ手紙、

（昨夜來診）今朝御藥取りに上げい。夜前ちと就寢時刻おそくなり、また理屈を申したり致しい故歟、寢そゝくれ、不寢の方にい。そればかりにて御座なく、又一行、瀉し申い（自注―これは就寢以前）、これは（泥のような）溏便也。その跡、腹に力なく、臟氣みな〳〵上へ釣上り申い、これは私、平時よりの常也、尙其の内御見合ひ下さるべくい。

十七日、昨今、喀血少しづつをさまる。

十八日、「京より酒來る。」（梅颺）

二十日、母へ又、酒三升送る。

廿一日、猪飼安次郎（敬所）、門人丹波佐治・小島四郎兵衞（省齋）同伴、見舞。折から鳩居堂（香具屋久右衞門）、その病狀を氣づかひ、易蘇堂といふものに易斷させた報告のため、梨影に逢うて歸る。

敬所は、廿三日、津藩儒（山陽門人）川村貞藏（竹坡）へ、

山陽吐血せられ、自身は大に懼れ、死を期し居られいへども、旁觀は元氣も易はらず、左はあるまじく、皆々申されい。廿一日、老拙、訪ひい所、追々快方と申され、元氣も

よく談話致されい。此後保養致され、却つて壽を保ち申さるべくと存じい。

膳所門人齋藤出雲、近來山陽と甚だ親しく、通議を贈られ、又外史を贈るべくと約いたされい。先日、齋藤方にて通議一覽致しい、山陽は誠に東坡の流派、當世の才子と存じい、彼の人の目は、一世を空うす。

更に四月廿八日、訪問の事に及び、

四月廿八日の夕、招かれいて、右齋藤同道にて參り談話致しい。其節、老拙、今時の儒者如何と問ひい處、龜井元鳳は西國の田舍漢、古賀侗庵は江戸の田舍漢、皆天下の現勢に通ぜずと、愚意にも此論至當と存じい。

廿四日、鳩居堂へ手紙、

筮の趣仰せ下され、御心頭に挂けられ、忝く存じ奉りい。其卦は何卦・爻何卦と申す事、承りたく存じ奉りい。唯空々に濁血とのみ承はりいては、合點いたし兼ねい。

必死と申すは、新宮涼庭・小石元瑞の說也。それにて覺悟仕り居いへども、死にさらに之れなくい也。

ボツ〳〵經書の說・著述などしらべ、身後のわけ知れい樣に仕りい。

山陽書後（自注—此の方、經史子、詩文等にかゝりい事）二册・山陽題跋（此の方、書畫にかゝりい事）一册、此通り貳部に分け、百五六十葉の書にいたし、昨夕、兒玉三郎に渡し申い。兼ねて御約の御座い事故、（出版の世話）よろしく賴み入りい。

三木三郎（八歳）、今日より兒玉へ入門させい。

この際、母への手紙に、

小供皆腹當ばかりにて、川這入のみ致し、梅雨、今月に延引にて、川水も增しい處、三木三郎、裸にて渡りい。これに依り、昨日、私、疾を力めて引きすえ、大灸すえ遣はしい。

私儀、十二日頃より痰血症にて、一時心配仕りい處、相止み申い。これに因り、白粥ばかりたべ、平生より腹工合あしくい。併し兎角去年の疫の殘りにや、時に邪熱之れありい……血症は相止み、其の上、外に申分とては少しも之れなくい故、千萬御安心遊ばされ下さるべくい。

七月六日、母へ手紙、琥珀糖を添へて。

七日、中川漁村へ手紙、

僕、死ぬ覺悟にて、著述（政記）の議論は、大氐了りい、紀事は、死後にても、知れいほどに相成り居りい。然りと雖も、此の一片の精神依然、天、此の有用の學を成さしめんと欲する乎、僕未だ遽かに死せざる也。

十一日、母へ手紙、小倉野二十を添へて。

十四日、元瑞へ手紙、

昨日は御來診……昨夜、常の如く、今曉未明、咳嗽甚だしく、痰の出樣も、かたまりと覺えいもの、多く出でい樣存じい故、いつもの如く紙にて取りいて、明けて後に驗しい處、又々此くの如きの血にて、今朝に至り、痰沫に少しづつまぜり出で申い。

唯昨晡惡風、俄に衣を添へ、昨夕も其の用心にて、少しあつく着て寢申い。少々盜汗（ねあせ）出でい樣にて、其の跡の事（吐血）にて御座い。

御藥も、もしや御加減も之れあるべくと、昨日の分は持たせ上げい。散藥、幷に蒲公英（たんぽぽ）など用ゐる事も、御指圖下さるべくい。

この日、猪飼敬所へ手紙、

先日（六月廿一日）は、態々擧玉（御足を勞し）、賤恙御省視下され、忝く存じ奉りい。

近所歩行は、醫者許しいへども、遠方は未だ許さず、御無禮打過ぎ申い。

其の内、閑暇を得させられ、夕方御納涼旁御來話、胸塵を一洗し、二豎をして辟易いたさせたく存じ奉りい。

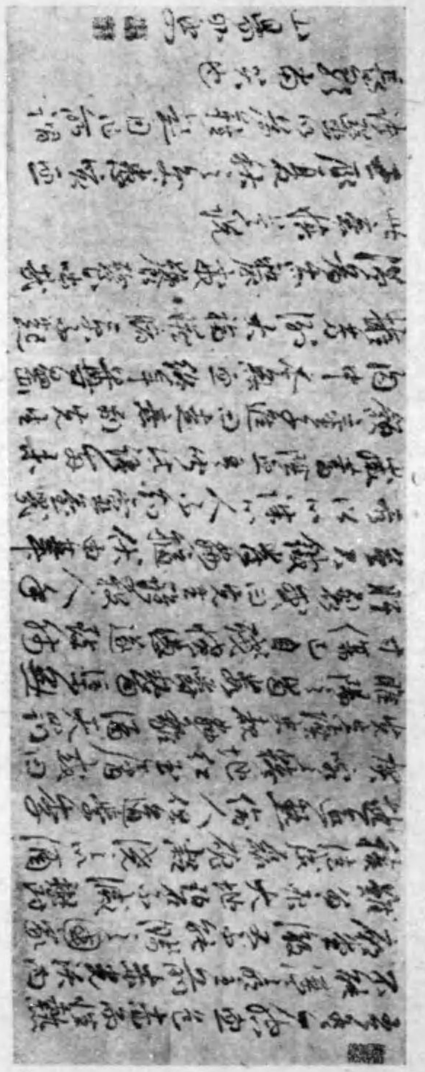
伊藤氏易解（東涯の周易通解）、存外吾が心を獲たる説ども、多く相見えい、唯卦綜の一節のみならず。病中故、墓取り申さずい、（易經と書經の學説發表を期してゐる今日）、今しばらく恩借希ひ奉りい。

十八日、杏坪より、元瑞へ手紙、

久太郎事、咳嗽・痰血など吐き申い由。當節、常太（立齋）歸省、承はりいへば、輕からぬ樣にて、新宮涼庭など仰せ合はされ、大方ならず御治療、精力成し下されい由。梅颺老人へは、先づ輕く申し置きい事に御座いへども、常太、有體語りい故、甚だ氣遣ひ申い。

廿一日、梨影より、梅颺へ、

姫路家老役人（河合寸翁）より、御見舞に、わざ〳〵と人來り、御菓子ども參り、見事な物、わけて上げ申い、御慰みに御あがり遊ばしい。



一二、「嗽血歌」　天保三年秋（五十三歳）

天保三年六月十二日、嗽血して後、病牀に在り、大患中、この詩を作り、自からその精神の依然たるを見るべしと云へり。七月二十二日、主治醫小石元瑞（藍園）への手紙に、その詩を作るべき由をいへれば、その數日後に成稿輝毫したるを忘はしむ。

こどもら二人とも、まめに寄宿致し居り、十五日、又二郎（牧百峯塾より）歸り、十六日歸し、十六日朝より、三木三郎（旗山塾より）歸り、（同夜如意ケ岳の）大文字（お盆の精靈火）が濟みいへば歸りい。

廿二日、元瑞へ手紙、

昨日も、いつも乍ら……。錬り藥、夜服の分、今一兩度不足に相成りい故、御製造の間合も之れあるべくと、器あけいて持たせ上げい。蒲公英の方は、御貯へ之れありと存じ奉りい間、少々殘りなりに、器持たせ上げい。

（御典醫福井丹波守—榕亭）老人（八十歳）が、序でに一診と申いて、診て呉れい。息子（棣園、近江守）とは違ひ、（醫）案頗る聞くべし。肺病ゆゑ至極御案じ申いと申い（自注—貴案と符合）。（藥方の）御考もあらば、小石に申し聞けらるべくと申いへば、滋陰降火、加犀角、昨年所司代（松平伯耆守宗發の病）を直しい舊方也。これが却つて腹力を生じ、咳逆を息めい力之れあるべく、小石に參考御託し成さるべくと申す事。論、陳腐に似たり、然りと雖も、武邊場數の老士大將、何ぞ手覺えもい歟。

韓文（韓文公全集）返璧。武家閑談、今少し（拜借）願ひ奉りい。

佩文韻府の、屑韻の所、血の字のある卷、一卷、此者に御附し希ひ奉りい。併し韻府を閲て、詩を作りい事、今まで之れなく、よし（やめ）に仕るべくい。

やがて成稿すべき病中の大作「喀血歌」七古長篇は、この際その構想中であつた。

廿三日、元瑞へ、

昨夕も忝く……。今朝御約の丸藥賜はるべき旨、取りに差上げ申い、用法等くはしく仰せ含まれい外に、例の瀉劑丸藥も願ひ奉りい。

咳・逆、近日先づ穩かの方と申上げいへども、今曉などは、やはり中からこれを迫蹙するものあり、咳かざる能はざるの氣味依然、今一息強く相成りいへば、先日（十四日）血症再發の時の狀と、同樣に之れあるべくいと、自覺い處にい。

廿五日、三回目の喀血。

廿七日、江戸福山藩邸・門人門田朴齋へ手紙、

通議は、何卒在世の人（當局者）の目に觸れいて、少しにても世の爲になりいへば虛しからずい。

樂府は、とくより信侯（牧百峰）に督促いたし居り申い、江戸書林にある筈など申し居

りい。

僕、此節大病を得て、生死知るべからず、別紙の詩（喀血歌）、几間に在り、御目に懸けい。（在江戸）餘一には必ず御見せ下されまじくい。

この日、また同じく村瀬藤城への手紙には、訴訟の利害を説いてその歸郷を勸め、

拙の恙は生來の大患也、何卒再逢の期あればよろしくい。死生、命あり、只僕が恨む所は、母に先だつて死するを、且著述未だ終らざるものあり、經（易・書）を解するに、十仭（の功）、一簣を少くものあり、これを恨となすのみ。

著述も大氐片付け整理致しいへども、大暑中、寫手果しかねい。論策（通議）・題跋は、皆々緒を成すこと久しく、梓（出版）を請ふ者あり、まさに付し去らんとする也。

廿八日、殘暑のため、隣座敷を借り受け、裏口より往來して、看護することゝなつた。

この際、河合寸翁より、姫路藩士一人を遣はし、看護を助けしめた。

三十日、菅東嶠へ手紙、

老母に先だつこと殘念にい、あの方へは先づ〳〵輕く申遣はしい。何分精神依然、舊作ども身後に遺しいもの、ボツ〳〵整理、日を消し居りい。

當夏より（鞆津）中村の保命酒に燒酎をまぜ、午前にたべい癖つきいて、燒酎三壜・保命四壜ほどアケ申い、是も血症の本に相成るべくと存じ奉りい。只酒飲まず、烟草吸はず、粥ばかり三度づつ、樂みは之れなくいへども、腹工合は平生よりよろしく、酒も匂ひもあしきと申す樣には之れなくい、一杯飲みたきは度々也。茶・菓はたべ申い。

八月三日、「京より書狀來る、七月廿一日出、干菓子來る、姫路より贈物の由。」（梅颿日記）

四月、門人、後藤松陰見舞。

この日、廣島へ、國分たばこを送る。

五日、故尾藤二洲の妻梅月死去。

この際、聿庵へ手紙、

善助（百峯）など、江戸まで知らせい樣の馬鹿を、必ず（母へ）云うて遣はすなど、決して致されまじくい。

百峯が江戸まで病狀を（聿庵自身に）知らせたような馬鹿を、また廣島へ知らすような馬鹿をしてはいけない——こちらは、今に重症とは言うてやらないから。

（在江戸邸の藩醫）中村元亮の說（醫案）、おもしろくい。

八日、『政記』紀事全部の修正を藤陰に命じ、程なく百峯と共同することゝし、「光孝天皇」より「後冷泉天皇」までは、やがて出來上り、元龜二年より末卷慶長三年までは、藤陰の手稿に成つたが、全部の淨寫は、後述、九月廿三日に至つて大成した。

この日、貫名泰次郎（海屋）見舞。席上、淸の黃百家筆の山水圖を示し、海屋、やがて摹本を作る。

十四日、小野招月・蘇庵へ手紙、

小石氏など、蘭方にて色々細工、療治致しい故、斷然漢方に轉じ、王道にて生死は度外に置き居りい也。

病氣も餘り長引くと、漢方が王道になり、蘭方を覇道にしてしまふ。そして福井榕亭あたりが、一時主治醫といふ姿になつた。

この日、聿庵より元瑞へ、

先頃以來、（父より）度々書狀越し、前月廿六日發の牧善助書狀又達し、承りいへば其頃意外差重り、誠に先生にも御骨折られ申い由。鄉里老母など承はりいはゞ、如何程氣

遣ひ申すべく、（東西）懸隔、彼是大氣遣ひ罷在り、小子心中萬々御深察成し下さるべくい。

奬藩（在江戸）の醫師（中村）愚案も少々書付遣はし申い、御覽も下さるべくい。米澤侯醫堀內忠藏と申す人の醫案も寫取り、御覽に入れ申い。並びに奬藩惠美三圭（三白・故春水の主治醫）醫案も附上仕りい。

十八日、また喀血。

廿三日、おなじく。

廿四日、聿庵へ手紙、

中村元亮立寄り申すべき趣、親切なれども、難有迷惑也。是迄輕く申置きいを、眞狀を見て、北堂大人に、如何申さるべくい哉。大津へ迎へ狀などの事、此の病中一騷動にて、大に氣につかへ申い。

暑さ寒さも彼岸までと申いへども、あつき事也、廿六日彼岸入なり、されば是よりヨクナリ申すべくやと存じい。

廿六日、後藤松陰へ、

（大坂）河（内屋）儀（助）出版の拙集（詩鈔）も關心の一也。

現刊本「西遊稿」までが、二冊・文政二年――八年が二冊になつてゐるのは素志ではなく、九年――天保元年あたり迄を加へ、文政二年――八年迄を減らしたかつたと述べてゐる。而かもそれはこの場合、彫刻も進んでゐて、何うする譯にもゆかなかつた。

中秋後、微腫・胸痞、これは當然の事也、（高の）知れたる補中（散）・益氣（湯）の如きものを飲んで、食事コナレルを主として、徐ろに天時定まる（天命を待つ）も可也、僕自處する所、亦然り。しかし此の節、又福井、間に合はぬ故、小石へ本の木阿彌となりい。又々、蘭方にアヘラレい、先づ漢・蘭を論ぜず、其の人の懇切取るべきのみ。

廿七日、中村元亮立寄り診察。又元瑞を訪ひ、藥法の所見を打合せた。

九月二日、すでに廣島へ歸つた中村へ、元瑞より、その醫案通り、童便を用ゐたる事、人乳は服用むつかしかりし事を報ず。

この日、梅颸日記に、「京より書狀來る、八月廿四日出、久太郎病氣、殘暑にて血症、八日の由也。」

三日、隣座敷を引拂ふ。

四日、元瑞へ、

昨夕は寢苦しく、大氐不寢と申してもよき程なりき。瀉は其後之れなく、時々惡心になりさうな氣味にて、飲食居合あしき方にい。咳は依然なれども、痰はよく切れ、土岐（錫）色はなし。小水、相應に通じ、腫れは依然と申す內、腹は瀉以後、少しは樂にいが、氣力脫するは甚だしくい。

新宮へも、見舞くれと申し遣はしい。

六日、元瑞へ、

惡心の氣味は、先づ治し申い樣に御座い。昨晝間は、咳ばとんと止み居り申い。彼の間服の劑、咳にもきゝいやと存じい程也。昨夕は依然臥し難くい。一行大便、硬通い、瀉せずい、――小水は究竟快通せざる方也。

八日、おなじく、

昨日も忝く……。脫肛にて大困り、鹽を燒き當ていて、こらへ居り申い、痢にはならぬ樣に存じい。

九日、敬所、津藩學問所（有造館）へ出講のため、見舞かたゞ〳〵來り、送別の心持にて、

「老丈來り、病牀に就いて對座、經史を商搉す、往々兩心對照し、愉快以て疾疢を忘るべし」といつた。

南北正閏論の爭ひも、この時であつたらしい。

二五、大患中に著述の整理（一）

その夕刻、門人美濃の神田南宮（數江柳溪）が、星巖・百峯・岡田鴨里と同伴見舞。山陽は、けふの節句にも心さびしく、病室の菊を吟じて、「今年、又黃花を看るに及ぶ」――菊の時節まで、まだ生きてゐるといつた。

十日、元瑞へ、

昨日も佳節御繰合せ……。昨夕も相應に眠り申い內、脫肛の方難儀、痢は居然（その儘）痢狀を成し、唯度數唯今にては至極少なく、よき事かは存ぜずいへども難澁、病勢を加へ申すべくいへば、大抵にて停止、他症に變じいてなりともと存じい。小水は依然淋瀝なれども、さして苦にも成り申さずい。

御約の粗末の高几、セリ立て、昨日出來い。寸法少々差誤あれども、御間には合ひ申す

べきや。何卒蒲團早く出來、チト〳〵此の上にて安神降氣の御工夫なされたきものにい。脚はアンクハ（行火）などにても、寒さを防ぐべくい、小手爐を筐中に入れて置くも可なり。何分御ついで、人、取りに遣はし下さるべくい。

山陽は平日、たゞの机ではなく、和蘭式の高卓を用ゐ、以前、萩藩・春曦夫人のお賴みに、それを摹造して差上げたこともあつたが、今又元瑞に賴まれて、同じ物を註文して置いた。この卓の式は、長崎の和蘭館で見て來たものに相違はあるまい。尙、椅子には虎の革がかけてあつた。

十一日、おなじく、

昨夕も忝く……。昨夕は少々咳嗽つのりいて、寢がたくいへども、昨夕あたりより、小水通利つきいて、今朝などは快通仕り、心下爽快此の上なくい、御藥漸くまはりいと相見えい。これならば痢（瀉）の方もさしたる事には相成り申すまじくと、嬉しく存じ奉りい。

この日、又小竹・松陰へ、

小生賤恙、此の節にては天候とゝもに、すはりい樣子。扨積勞出で來り、立の物を横に

する氣力もなくなりい。然し一片の精神は依然たり。

拙著『政記』も十四五卷に相成るべく、案外卷帙頗浩大にいへども、『(大)日本史』を觀るは大造なり。『國史略』(巖垣松苗著)は年代記同前。(政記は)日本の事を展觀、實に經世の務に補ひたくと存ずる人には、屈竟の書也。時變多く(武家の世と)なりい時節より、事迹は『外史』に讓る心なれども、論は割より少なし。奮發一來、永訣下されいては如何。

併し此節の樣子にては、永訣せぬも知れぬ樣也。されど今來られて、肺氣を動かすより、來月小春の頃に御出で下されても妙なるべし。

「小春(十月)の頃」に來て何とする。私は今、原稿の筆を進めつゝ、一日も早く來てくれと念ずる外はない。

此の霖(ながあめ)にて、秋稼、大(臺)なしと存じい、米價如何。

大坂の米相場はといふ心持は、『通議』の著者として、そこに大きな關心があつた。

河喜の梓は如何、河清、竢つべき樣なり。チト板下に書いたを減じて、早く刻(ほりあ)上げては如何との議はいらぬ事歟。

これは『詩鈔』出版の責任者として、松陰その人に對する警告であつた。大坂久太郎町の書林河内屋喜兵衛(河儀・河茂と共同して)が、何をぐづ〳〵してゐる。黄河の水は百年待つても「河清」はだめだ、「河喜」へ早急催促せよ。

『政記』は大造、此の上木(出版)は、死後と相成るべくい。此の論ばかり鈔出して刻しいも妙ならん。唯今にては唯箇樣の事のみ關心、道力不足とも申すべくや。しかし皆皆世道人心に關すること、細(小事)に匪ざるもの也。

『大日本贊藪』の如く、論文だけでも、生前に出したかつた。

此間委頓(病苦)の極に、『政記』最末に、豐臣氏間竿(けんざを)(檢地)の法、先王の制を一變しい事極論して、徹頭徹尾の括りと致しい、此の精神は未だ死せずと相見えい。

これは堂々たる一篇の大減稅論、「豐臣氏」といつてゐるが、實は「德川氏」を諷する。

大化の革新には、三百六十歩を一段、二段を口分田として、女には三分二の租稅を免ぜらる。一段の收穫が稻五十束、稅が二束二把、一束が五升、一段に二石五斗、二十分一よりも輕い稅として、それを正稅とせられた。

それが豐臣以後になると檢地が一變して、三百歩を一段として、それを積算すると、一千

町に六十萬歩を加へる外、一歩に間竿を二尺縮めて、無法な税源を勘定した。

然らば結論は何うする―（政記を見よ）。

「是れ爲政者に於ては、上、天地に謝し、中にして先王に謝し、而して下にしては、子孫の爲めに長久の福を祈ること、誰を憚つて爲さゞるか」と、それは又、『通議』の「民政論」にも説かれてゐる。

山陽が畫像の自賛（歿前間際の作）に、

一室に偃仰（寢起き）して、心は百代の失得に關し（外史・政記の論文）。己れが鹽齏（家政）を恤へずして、人の家國を憂ふ（新策・通議の著述）。

と言つたのは、この意味であつて、そこには、幼年作の「立志論」が、いよ〳〵ものを言ふ。

それと同時に、又その學術と、詩文・文藝の一面には、『書後』と『題跋』の外には、更に「詩文集」・「書翰集」を留め、風流文雅の上には又、書畫の遺作が堆かく積み上げられ、その餘韻流芳の匂は、永く後代にゆら〳〵してゐる。

更に〳〵一家本來の儒學者として、その立場からしてが、全く時流に超越して、學術の爲

めのそれではなしに、その學術の適用・實用を大主旨に、門下の教育をその方面に指針して、幾多の人材を薫陶したことは、思ひがけなき事實の上に表徴されてゐる。

若し夫れ、これを國體闡明の上に就いて、其の歪められて來た幕府政治を呪うて、光りかがやく、皇政の發揚に、心身を賭けて、如何に時勢の流れに、血み泥の戰をたゝかひしか。國を離れては不忠、親が世間に對する遠慮の上から、不孝と呼んだ眞相からは盲目にされて、さうかと思ひ違へしてゐては、山陽本人の迷惑こそ、まことに氣の毒ではあるまいか。

翻つて、時代は正に宋學一點張りの埒が張り廻らされ、おまけにその張本人、否、その土臺の砂持役を勤めた父の子として、父が宋學主張の上に始めて白川樂翁を、その壯年時代に動かした「學統論」に對して、

世或は謂ふ、「襄や家學に背き、甚だ洛閩（宋學）を信ぜず」と。襄は曰ふ「唯甚だ信ず、故に甚だ信ぜざる所あり、其の甚だ信ぜざる所あればこそ、以て其の甚だ信ずる所の私に非ざるを知るべけれ」と。

そこに、一家の安心立命が在つたのであらう。

儒學の獨參湯――『論語』『孟子』の如き、すべて註釋入らずの白文しか用ゐずして、「其の

言ふところ、宜しく平易に曉りやすかるべし、後儒、これを鑿深して、乃ち其の旨を失へり」といひ、ごて〳〵せんさく三昧の註釋本を排斥したといふことは、そこに獨自の目を見開いて、文字學者の仲間入りしなかつた所に一家の見識を思はねばならないのみか、註釋そのものが、却つて本文を讀むよりかもむつかしい場合に逢着することは免かれない。左樣なことに彼れ自身が、あの短命の一生涯を葬つたとすれば、「賴山陽」は、現代に活きてゐないであらう。

彼れは、その晩期に、自家一流の學術を明示すべく、孔子の『春秋』を始め、『易經』と『書經』を取り上げ、その研究の發表に努力しつゝあつた。『春秋』だけは、おかげで、その十分の二だけが、百年祭の記念として公刊されたものゝ、あとはほんの手紙の上に、その熱心さを窺ふだけに止まり、それらの新らしい業績は遺憾、今日に見るよしはないが、『春秋』の方が不意に出現した如く、どこから又他の原稿の一斑だけでも發見されようも測られない。

文藝の雄、蘇東坡にしても、その四十五歳の時には、「易傳九卷・論語五卷」の新研究があつた。「日本の東坡」にも、それが事實の上に現はれたらばと念ずるのは、ひとり私の希

望だけには止まるまい。

十二日、元瑞へ、

此の中旬過・廿日ごろなど、又々血症をあらはし申い樣の事はあるまじきや。此の節の疲勞にては、一たまりも致すまじく存ぜられい。申す迄も之れなくいへども、御預防の計りごとも託し奉りい。

おそろしき豫感、何やら危い事實が、そこへ顏を出しはしなからうか。

昨夕も大氐不寢也。小水は今朝又々たまりい故歟、よく通じい。脫肛は依然たり。新宮の膏藥用ゐ居り申い。

又、小竹へ、

昨夕、雨窓惜々として、病懷殊に無聊の處、忽ち芳翰に接し、且大封、何かと存じ、疾く析きい處、拙集（詩鈔）冠冕の辭（序文）、愉快の文、病魔を千里外に驅逐するの心持に御座い。

とその序文の原稿を、縱橫無盡に、朱筆を運び、褒めたり、削つたり、書き加へたり、心ゆくまで眞赤にして、喀血ではないかと怪しまれるばかりであつた。それを、

河内屋に早々雕らせ申したきものにい。大楷に御書き下されたく、正大の文、正大の書法を用ゐ、覽るものをして、快心洞目せしめたく存じ奉りい。是れにて僕、以て死すべきなり。（東坡は）四海、一の子由（弟穎濱）と申しいが、僕、生まれて兄弟なし、老兄を得て、啻に同胞のみならず、此の知己の言を辱うして、感銘申し盡しがたく、先づ一謝を容る。

この序文は、楷書ではなかつたが、山陽改刪のまゝを小竹が、その本文に書き添へたのは、他に餘り見受けない新例であつた。

二六、整理中に終焉

十三日（歿前十日）、元瑞へ、

鯉魚、小水を利しい效、著るしく見はれ、私も經驗御座いが、「鯉魚湯」の法の通りに致さずとも、粥の菜に一切れ烹て、烹汁を併せたべい樣の事は、如何之れあるべくや。鼈の儀も申上げいへども、腰脚腫氣、夜分もだるくいて困りい位にいへば、利水急務と存じつき申い、如何。

扨も快晴、氣候全く定まり、九月節に相成いと相見えい、こゝにて命を拾ふ乎、否、相決し申すべく存じ奉りい。

机、今一息（出來損ひ）今一脚拵へ直させ、近日出來申すべくい。

この日、『政記』南北朝論の後の一篇を稿了した。それは對猪飼敬所の形式で書かれ、その論旨を攻擊して、峻烈餘す所なき堂々の筆陣、敬所の在京中でなかつたが、定めてその問答の要旨は、先日の席上、敬所の方からその意見を持ち出したのを、今死生の境に立ちつゝ、このまゝ、聞き捨てにしてはならぬからとの執筆であらう。（頼氏正本卷十四）

後、弘化二年、小竹は、河内觀心寺・「楠公首墓」の碑文初稿に、

夫れ公の軍功忠烈は、天下の知る所、また言を待たず。獨り皇統の北に并はせられしを以て、人或は公を疑うて朝敵と爲し、足利・織・豐數氏を經て、追褒聞ゆるなし……近歲友人賴襄、皇統の南と北とを以て、岐かるべきに非ざるを辨じ、而して後、天下翕然として、また異議なきなり。（碑刻には削る）

と言つたのは、この論文を指すのであつた。今や畏くも吉野朝・京都朝と申上げ奉るに至りしは、我等臣民の恐懼に堪へざる所なると共に、山陽の史眼には大きな注意を怠つてはな

らぬ。

吾れ之れを極論せんと欲するも、而も肺疾あり、（敬所と）劇談すべからず、遂に更に一論を作る。九月十二日夜、咳あり寝ぬること能はず、枕頭に就いて腹稿し、明日（この日）、稿を錄すること此くの如し。病困綿綴（附き纏ひ）、精神こゝに止まり、精思する能はざるなり。

この日、元瑞より、杏坪へ、山陽危篤に近きことを報じた。

十四日（歿前九日）、元瑞へ、

昨夕も忝く……。鯉魚汁、御指揮を奉じ、汁ばかりを空心にたべ申い所、今曉迄兩度小水快通仕りい。御喜び下さるべくい。それ故か、近夜に之れなく安眠仕りい。

此の茄三十個、鴨厓にて昨夕、鴨林翁（賀茂季鷹）、私の好物とて、只今摘み取りい由にて持參い。今午飯か、御辨當に御用ゐ試み下さるべくい。

机、今日出來申い、早々取りに遣はさるべくい。

それを急には取りによこさなかつた。

この日、小竹と松陰は、廣瀬筑梁を伴ひ、見舞に來て二泊した。同時に星巖も、江戸行の

暇乞ひをかねて來た。「星巖と話別」の作に、

燈は黄花（菊）に在つて、夜、分たんと欲す（夜半）。明朝、去つて蹋まん、信州の雲。

一壺、酒竭くるも、姑らく起つを休めよ。死に垂んとする病中、還、君に別る。

星巖は、十七日の夜、東海道を下りつゝ、駿州あたりから、

山を談じ水を話して、宵分に到れり。大堰の奔流・函嶺の雲。

醒つて恐る、郵亭孤枕の夢。屋梁・落月、夫君を見る。

と、旅の空で、別れた君の夢を見ると次韻した。

十五日（歿前八日）、元瑞へ、

昨夕も……。（自注―この一句、馬首の絡の如く着けざるべからず）。御指揮に任せ、鯉汁又々申し遣はし、たべ申い、又々兩度快通仕りい。今日は糟粕下ると存じい。

時に商陸（山牛蒡）、八百屋へ申付けい處、早速大葉、牛蒡の如きもの取り來りい。五郎（藤陰）申いは、是れ眞の商陸にあらずと。今日は（門客・醫）後藤左一郎、采藥に參りい樣子故、頼み遣はしい積りに御座い、又御診の時に申上ぐべくい。

手紙には、「九月十五日」の日附に、「關ヶ原の戰まさに始まらんとするの時刻（午前八時）

と、その時刻が、又しても病苦最中にも、そんな筆てんがうを慰んでゐる。

また一通、前の造り直させた高卓を、今やつと取りに人をよこしたので、

机、貴价に附しい。よく見れば、ヤハリ粗末にいへども、高きものなきよりは、ましなるべし。此の机に付けい硯匣・卷紙・小蠟燭立ての類、御定め置き、たび〳〵取り寄せぬ樣に成され、或は此の机にさらさ大風呂敷などをかけて、其の下に脚爐なりと何なりと、自由出來申すべくい。安神降氣、以て門弟子を遇する、是れ亦自愛、壽を計るの一端也、故人（舊友山陽目身）の囑意、御深領下さるべくい。

と、又もや「關ケ原、井伊退き、福島進むの刻」（正午頃）と冗談を書いてゐる。

小竹が、また引返して見舞つた。それを迎へて、

喜んで聞く、吾が友の聲。　疾を力めて、咲つて相迎ふ。　筐裡、新著（政記）を出だし。　病來、課程を成す。　丈夫、知己の在るあり。　生死、前に向つて行く。　酒あり、君姑らく留まれ。　嫌ふを休めよ、航（さかづき）を共にせざるを。

小竹は、これを「詩の絶筆だ」というてゐる。「生死」の一句は、杜甫の「前出塞」の詩、「……。不レ勞二吏怒嗔一」の前の句を用ゐた。

この日、元瑞へ、

昨夜は、よく御話成されい。（門人が）良造子をまきいは、氣の毒なれども、それにてさへ、よきほどに肺氣を動かしいと相見え、昨夕、咳終夜、寢る能はずい。小便は、四合に少々不足と申い。

「良造」（元瑞の庶子、小關氏・拳齋）は、看護に來てゐたらしいが、特に遠ざけて、話に實が入つたのは、先日からの百峯と元瑞二女梅生（うめを）との緣談に口次ぎしてゐた事であつた。

扨此の十日ほどの處、大事にいへば、とんと臥蓐、或は坐蓐、動き申さゞる樣に仕るべくと存じ奉りい。

十七日（歿前六日）元瑞へ、

昨日は暫時御同席を得い（小石は打合せのため、午前に來た）。其の後、小竹宴飲は、神飛の至りに御座い、善助に緒論（その席上の談話）承はり申すべくと存じ居い。

それはそれとして、當用は、

小子昨夕も不寢なれども、一昨夕ほどには之れなく、尤も起坐、背を摩せしめいへば、咳をこらへ、其の內暫時まどろみ申い。小便は半を減じい、又々鯉汁用ゐ申すべくやと

存じい事に御座い。今日は、丸薬御加減下さるべき旨、何分よろしく願上げい。

そろ〳〵（いやな）刻限に相成り申い、懼るべくい。

十八日（歿前五日）、同じく、

昨夜は不時鬱蒸、又々、先月廿二日の様子にて、咳嗽轆轉（ごろく）、終夜背を摩でさせいて、曉ごろ少々寢に就きい、先づ今朝まで別症も發し申さずい。

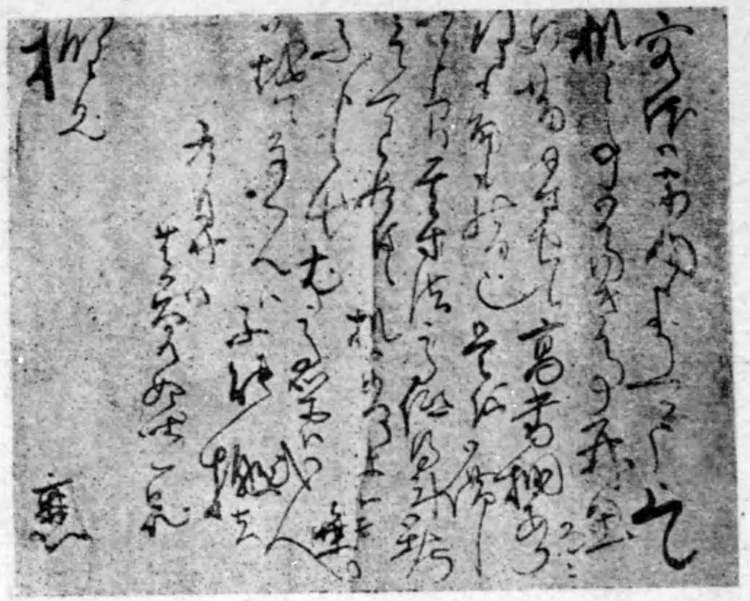
昨夕、鯉汁申遣はしい處、工合惡しくい歟、キヽメ好からず、小水三合强と申い。今夕は佳品を選ばせ、用ゐ申すべくと存じ奉りい。晝より用ゐ置きい事、然るべくと存じ奉りい。咳は尿の通否に關せざる處も之れある歟と存じい意之れあり。

さて百峯の緣談は、

善助の事仰せられ、家内より呼びに遣はし申聞け、猶私直談、縷々相盡くしい。是れは小生に在りては則ち兩家の爲めに忠謀せねばならぬ事、一定說あり、今日ちと早く御見舞下さるべく、申し罄（つ）すべくい。

その話は進んで、ことし十二月廿二日、いよ〳〵結婚となつた。

十九日（歿前四日）、母へ手紙。それが廣島への絕筆となつた。惜い哉その内容は未知。



一三、大患中、主治醫小石元瑞に寄する手紙

天保三年九月廿日（五十三歳）

天保三年九月二十三日の歿前三日、危篤に瀕して、猶この餘裕あり。その内容は、是れより先、自家常用、和蘭風の高卓を、小石元瑞の望みに依り、摹造せしめしも、再度意の如く成らざるに由り、最後にそれを元瑞に貸し、その手に摹造せしめんとしたるは、大患中自からその周旋に當り難かりし爲めなるべく、その友誼の深厚なるを見るべきもの。

（京都・小石鶴太郎氏藏）

この日、通議を補ふべき、幕府の大奥政治を對象とする「内廷篇」の稿本を書き改めて、藤陰に淨寫させ、それを江戸下りの途中、伏見に居た、姫路河合寸翁（在江戸）の子、屏山の旅宿へ持たせてやり、かねて寸翁の手元へ贈つてゐる寫本に綴ぢ込まれたしとの意を傳へさせた。その自寫本は、歿後に梨影の手から藤陰が預かり、それを後述、聿庵への手紙と同封發送された。

この日百峯・節庵・旗山の連名にて、聿庵への病狀報告の手紙が發送された。それが廿七八日頃、江戸へ屆き、聿庵は直ぐ應急手當として、一歩丸（一貝十三粒入）を求め、返書に添へて、日本橋の飛脚問屋へ託さうとすると、十月一日までは飛脚便がなく、同時に廿三日の訃報を受け、右返書と藥の發送を見合はせた。

二十日（歿前三日）、元瑞へ、

容體は、家内より申上ぐべくい。

診察は連日夜間の例となり、その翌日、爾後の容體を報じ來つたのが、けふは梨影が代筆することゝなつた。又、外への手紙に、

廿日ごろ御氣遣ひ申上げいゆゑ、御氣分はいかゞと御伺ひ申上いへば、いつもかはりな

く（とは申されしが）、小右ども大そう御むつかしく申し、誠に御氣づかひ申上げい。

山陽の手紙は、別に、

机の事、御易き事。再思するに、私昔日させい高書棚あり、何も角も粗也、是れを御借し申すべくい間、其の寸法高低、得と御考にて（職人へ）仰せつけらるべくい。机は如何ほども乘り申さずい也。尤、高架は貳人御越しでなくんば、搬去する能はず。

これでみると元瑞は、さきの高卓には、書物をでも載せるには小さいから、何かそのへんの事を言つて來たものらしく、それなら古い高書棚を貸して、それを手本に新調するがよろしからうといふわけであらう。

手紙の末には、又、

芙蓉、始めて一花を吐く。

その花一つが、またどれだけ病苦を慰めたであらうか。

梅颸日記、「京より書狀來る、當十日出、小ぐら野二十・新樽酒三升來る。」

二十一日（歿前二日）、梨影より、備中・小野招月の娘（小野壽太郎妻）への手紙に、く

はしく山陽病狀を消息して、又、

昨年御預け申上い金子、此の月限りにいへども、此方に入用御座なく、やはり御預り置、利銀は御上せ下されたく、證文の此月とありいゆゑ、別に御認め替へ下されいやう頼み上げい。此段くはしく申上げい様に申付けい。憚り乍ら、千藏（泉藏―招月）様へ仰せ上げられ下さるべくい、御めんどう様ながら早々頼み上げい。

廿三日、「けふは朝から息切れがして、からだの調子も少々をかしい。朝の内にと、ゆふべも頼んで置いたが、小石さんは、まだ見えないか。その間に一寸書き物もしたいから、巻紙の長いのを、三郎（菅自牧）に、さういつて、繼がさせて呉れ」といつた、多分遺書でもしたゝめる積りらしかつた。

梨影は心配して二見を宅へ呼返し、牧百峯も飛んで來た。藤陰は山紫水明處の方で、『政記』を寫本してゐたが、いそいで病室へ呼ばれ、「あの續き（元龜二年より先きのところ）は、どれだけ出來たか」、「しまひ迄出來まして、只今清書にかゝつて居ります。」とそれを差出したが、はや添削する氣力はなく、「此の書いて置いた跋を急いで寫してくれ。」といはれ、やがてそれを書き上げて見せると、眼鏡をかけかへて、いろ〳〵書き入れさせつつ、さも滿足らしかつた。四時は早や過ぎてゐる。

一四、頼山陽塑像

世に多く傳へらるゝ畫像は、天保三年九月の喀血後、門人大雅堂義亮に命じて寫さしめしものに係り、異常に容貌の衰へたるを想はしめ、同じく門人・中津藩士野本狷庵が、その顴骨の稍高く、頰の稍痩せ、顔面の稍廣く短かくして、その子聿庵の容貌が、全く先師の風采に肖たるに反せりといひしを信ぜざるを得ず。

この塑像却つてその眞に近きものあるを思はしむ。（家藏）

病室には、梨影の外、弟はどこへ往つたか、兄又二郎と、外には牧が、默々と看護してゐる。菅は、寄宿生の末森三輔（秋山）と、今交代に來たばかりであつた。

その時、つゞけさまに「暑い〳〵」といふ聲につゞいて、襖も屏風も取りのけさせたところへ、小石も來診して、「それでは、サフランをあげませう」と外へ出て往つたあと、「五郎さん〳〵、先生が御呼びです」。日が暮れかゝり、一寸引返して寫し物を片づけてゐた藤陰がいそいでくると、「背中が痛む」と、うしろへ廻つて撫でさすり、腰のあたりには梨影の手があつた。

小石は牧と、別室でひそ〳〵話し込んでゐたが、すぐに戻つて、五郎に耳打ちした。

みじかい日脚は、とつぷりと暮れそめて、うすぐらい行燈の火先が秋風に煽たれ、人々は一樣に靜まりかへつた。「五郎は」とひと言呼ばれて、「お脊をさすつてをります」といふ梨影の聲と共に、「五郎でござります」と答へたが、そのまゝ言葉はなく、もろ手を動かして、又二郎の手を取らんばかりに見えた。

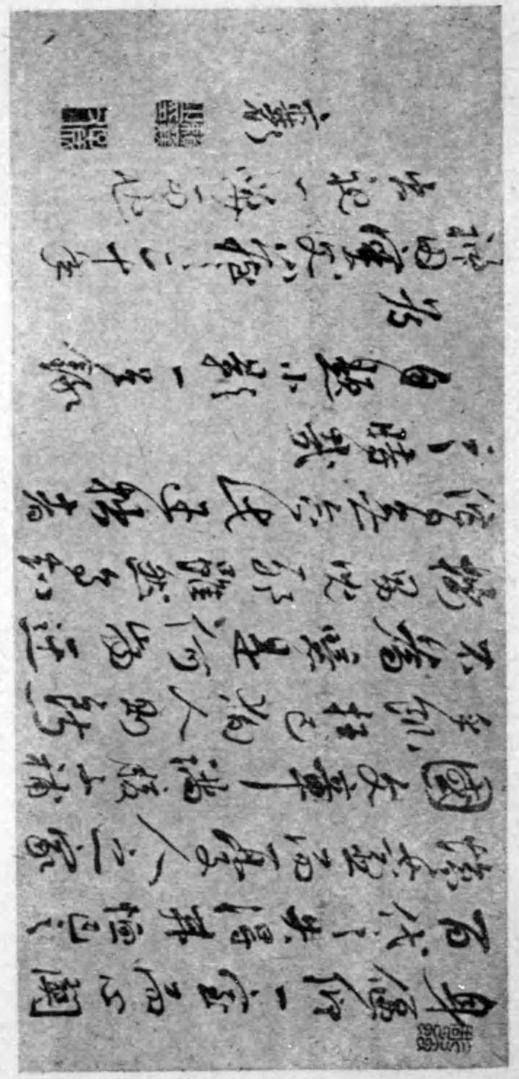
五郎が、口早やに、「先生の御目が」といふ。皆がそれを見て、瞳のつり上つてゐるのに驚いた。又二郎も、びつくりして、「おとうさん〳〵〳〵」と、ふた聲三聲呼びつゞけたが

何の答へはなく、それでも聞き取られたか、只打ちうなづいたまゝであつた。

梨影は、水をくゝみて、その口中へ吹き込み〳〵した。「三木を早く」と呼びにやり、陽子もそこへ連れさせて來た。牧は小石と共に「先生々々」と、そのからだへ、しがみついたが、そのまゝ呼吸は絶え果て、今や文豪の英魂は昇天した。時に午後六時。

この日は、陽暦に換算して、十月十六日に當り、享年五十三歳は、五十一年十ケ月にも滿たなかつた。

葬式は、九月廿五日、千本綾小路光林寺へ、棺側には關藤藤陰と菅自牧、次に支峯・三樹兄弟、天野俊平、（聿庵代理）末森秋山、畑十左衛門、小石元瑞、小關拳齋、後藤松陰、宮原節庵、牧百峯、久保元碩、村瀬太乙、兒玉旗山、牧文吉、秋吉雲桂、後藤左一郎、齋藤九和、福島元仙、村上等一、物集西阜、奥村柳庵、川上東山、岩崎鷗雨、木村安長、三井高福、家原清藏、横田彦兵衛、小石蘭室、馬木南城、香川杢、石井美濃守、大八木靜齋、山岡禮藏、片寄源藏、及び大雅堂（長喜庵）義亮、建仁寺（越前丹生、淨勝寺）丹山の葬列であつた。



一五、畫像自贊一則

天保三年九月九日（五十三歳）門人大雅堂筆の畫像に題し、門人神田南宮に與ふ。

この自贊は前後二首あり、これその第一首にして、門人、美濃の神田南宮（數江柳溪）に與へしもの。末に「神田實父（その字）の爲に寸、實父これを藏すること二十年にして、出し視、一笑して可なり」と識したるは、そこに遺言らしき意を感ぜしめずんばあらず。天保三年に發して後二十年は、即ち嘉永二年に當り、天下の形勢、徐ろに推移して、安政以後、幕府政治衰滅の地を爲しはじめたるを、有意無意の間、何等かの豫感ありしにはあらざるかを想はしめ、その文意に徴して憂國の情勃々たるものを看取すべきなり。南宮の來りて、その病床を見舞ひたるは、即ち九月九日に在り。

遺族・親族の燒香順は、支峯・三樹に次ぎ、聿庵の代香は末森秋山、陽子代香の菅自牧、梨影のおなじく關藤藤陰、親族總代の同天野俊平の外、畑・小石兩人に次ぎ、梨影の養家・京都械屋嘉兵衛の人々であつた。

光林寺には、亡兒辰藏の墓碑（文政八年建）の石面へ、

山紫水明居士。

居士者。山陽賴先生也。天保三年壬辰九月廿三日歿。葬二長樂寺山上一。瘞二遺髮于此一。遺骸は、遺志に由り、卽夜、長樂寺山に埋葬。やがて篠崎小竹の書にて、「山陽賴先生之墓」の碑が建てられた。

山陽賴先生之墓。天保三年壬辰九月廿三日歿　享年五十三（裏面）

第一着の弔書は、大鹽平八郎より、小石・秋吉宛てに發せられたものであつた。

山陽子、當四月下坂訪はれ、當秋は九州路探勝同伴相約しい處、今度の凶變、實に存じ寄らざる事に御座い。天下の材、五十有餘にて歸泉、誠に惜き事に御座い。

廿九日には、小竹より同じく七古長篇の弔詩を添へ、その他續々諸名家のものが幾十通も

着した中にも、竹田は白描觀音を寫し、特に最近山陽の贈つた黃玉材に手刻の「小白石翁」の印を用ゐ、塡詞を題して、弔書に代へた。「白石翁」は明の南畫の大家沈石田の別號、竹田は平生畫ごゝろをこの人に寄せてゐたからと、特にこの印を贈られた。さうして東上の途中、雲華の正行寺に宿つてゐた時、山陽の訃音に接し、雲華と前後に出發入京した。

聿庵は、江戸より四月廿七日入京、跡始末の上、支峯（十歳）を連れて廣島へ歸つた。

『外史』が世に刊行されたのは、天保七年に、江戸下谷御徒町の中西忠藏（伯基）が、『拙修齋叢書』の中に、木活版で出したのを始め、次は川越藩の事業として、弘化元年十二月、桑名藩の松平家から、樂翁公傳來の原本を借りて發賣した「川越版」が、非常に流布し、藩の財政を持ち直したといふ盛況であつたが、京都でも急いで着手の上、嘉永元年八月二日、「賴氏正本」の美本を發刊して、一世の要望に答へ、その出版に當つた大坂の書店柳原・江戸の坂上外一團から、年々に賴家へ納めた印稅は、一部銀三匁宛として驚くべき多額に上つてゐた。試みに明治十三年四月、坂上より出した證書を見ると、新年以來の分であらう、貳千圓を送金してゐた。その前後、今日まで又その注釋とか何とか、その他いろ〳〵の出版は、それこそ底知らずの大量に達してゐた。

清の光緒元年（明治八年）と四年（十一年）とに上海版・西暦一九一五年（大正四年）には、ウラジホストツク東洋學院から、露語の譯本も出版された。

山陽五十年祭には、明治十四年三月廿一日、畏くも「夙に尊王之志篤く、書を著して大義名分を明にし」たとの御沙汰を拜し、祭粢料百圓下賜あらせられ、祭典は賴支峯の名により、洛東迎賓館に於て行はれた。廿四年十二月十七日には、更に「贈正四位」の位記を賜ひ、翌年三月廿一日、長樂寺に於て奉告祭を行ひ、最近昭和六年五月十六日にも亦同じく、廣島縣廳内の百年祭記念遺蹟顯彰會に對し、祭粢料參百圓の下賜を辱うし、九月廿三日には、更に「贈從三位」の破格御追贈を賜ひ、宮内省よりは策命文を下し、十月十三日、京都府知事を勅使として、長樂寺山に差遣はさせらる。十月十六日（殁日九月廿三日の陽曆換算）には、舊藩主淺野長勲侯總裁の下に、廣島西練兵場に於て百年祭の盛典が執行せられた。

ひゝに恭しく、

「策命文」を謹寫し奉る。

天皇乃

大命爾坐世贈正四位賴久太郎乃墓前爾

宣給波久止

宣留汝命波著作爾事托世氐君臣乃大義乎天下爾明良米志賀其乃功波

明治乃維新乎仰久基乎成世留乃美加波現代爾母著志故曩爾

正四位乎贈良世給比志乎今回更爾

從三位爾進給比

位記乎授賜布是乎以氐京都府知事黑崎眞也乎

差遣志氐如斯乃狀乎

宣給波久止

宣留

昭和六年十月十三日

卷後に

贈從三位頼山陽が一代の本領は、申すまでもなく、『日本外史』『日本政記』の著述と同時に、『新策』『通議』の經世策に在つた、而かも『政記』は『外史』の派流であり、『通議』は『新策』の修正に外ならぬ。要は國體の精華を闡發し、一面、政務の要諦を論破するに在つた。

金甌缺くるなく、大一統萬世無疆の、尊嚴冒すべからざる皇國本來の姿が、武家政治の爲めに、鎌倉幕府この方數百年、現に其の身の生を享けつゝあつた時代の實情は、征夷大將軍そのものが、文官の極位、太政大臣をも兼ねるまでにさへ成り行くべき形勢が、早くすでに見透されてゐたのであつた。

當時の學者――儒者は、實にこの際に處して、如何に盲目であつたか。幕府の主權者に對して、それを「大君」と呼び、その政務を執行する公衙を稱するに、「朝廷」と申す僭上をさへ敢へてしたではないか。國體の精華はいづれに、大義名分の頽廢は何人がそれを矯正する。

一藩國の儒者の子として人となつたその身は、部屋住といふ遊惰青年に安んじ、その境遇

にぐづ〳〵してはゐられなかつた。持つて產まれた癇兒の癇は見る〳〵爆裂して、國境を跡に、どこへやらその身を隱す、追手は四方へ飛ぶ、中國・近畿、果ては奧羽のあなたへまで、その脚は遠く伸ばさるべくあつた。

いづくんぞ知らん、當人は平然と京坂の間に落ちついて、その潮合を見はからひ、ぬつと故鄕に舞ひ戻り、御慈悲の一室に監禁ならぬ身を橫へつゝ、こゝに始めて「宿志」の達成を樂みながら、悠々として、『外史』と『新策』の起稿を急いだ。酸いも甘いも嚙みこなした老巧皮肉な菅茶山は、にたりと笑を呑み込んで、それを「奇謀」と感心した。九つの時から、その才氣を見拔いてゐたゞけに、その破天荒な一言は、この人ならでは誰かいふべき。

いや、それも慧眼、淨玻璃のごとき、かんじんの殿樣は、また何といふ解事者であらう。江戸屋敷から廣島の空もようは一目千里、お膝元はなれぬ父春水をびつくりさせて、或る「恩命」は天降り、父は恐惶頓首したまゝ、あたまを下げた。世間的には牢舍に押籠めなければ、一藩のしめしは立たず、一家の自肅は見せられなかつた。

そんなことをこちらは頓着しない。三數年の短かい時間の產物に、驚くもおどろかないにも、そこに廿二卷の『外史』と、別に、否、同時に、三卷の『新策』の新しい匂ひがぷんと

した。

むかし漢の司馬遷は、『史記』の原稿を、いた〳〵しくも、からだのきふしよを斬りさいなまれたその上に、「蠶室」といつても、かひこをそだてる部屋ではない、「宮刑」とかいふ、あまりはつきりとはいへない處刑者を投げ込む處で書いたといふ。それにくらべて、日本の賴襄が、筆硯に惠まれる、參考書は何でも申せといふ境涯を何と見る。

『新策』は姑らく措く。『外史』の初稿は、「豐臣氏」までのつもりであつたが、こゝまで來た以上、つい現代の空氣にふれたいのが人情、いつそ德川までやつゝけてしまへと、思案はしてみたものゝ、首筋へ手をやつて見るとおそろしや、そこを上手にぼかすより、下手におべつかをつかふが上分別と、褒めもほめたるお追從に、

武門の天下を治むる、是に於てか、その盛を極むと云ふ

とわれながらその文才におどろくついでに、現代大江戸のお城のいかめしさから、諸國諸大名の邸宅の廣大もないおどそかさを、これひとへに東照大權現樣の御餘光ぞよ、と結びをつけて、ほつと一息、苦しからぬいきをつき〳〵口元をそつと拭つた。

かうして置けば、先輩中井竹山のをぢさまが、德川家の頌德表と天下晴れて『逸史』を公

刊したまねも出來る。折角書いた『外史』も世間へ出さねば、何のへんてつもないではないか。しかも、もう一つ吾れながらにこんな智慧が何處から出た。

『外史』開卷第一には、何くはぬかほして、歪められてゐる國體を、正道眞理の上から論じて、幕府といふ大きな癌の病根に、ずばりと筆誅を加へて、わしは知らない、「後の、世を憂ふる者に……」と、空うそぶいてゐたところへ、老中の隱居松平樂翁から、その相續者ー松平定邦が、大將軍名代として、太政大臣謝恩入洛の御用ついでに、『外史』をもらつて來いとの復命よろしく、はては序文をいたゞいて、何時なりとも天下公刊の自由を許されたとは、全く皮肉を通り越してゐた。

その一面には、事前の文政九年十月十八日、第二の父ともすがつてゐた菅茶山へ、內々の手紙のはしに、

關東、太政大臣と申す噂がございます。左大臣さへあるに、また〳〵いかゞの事にや。むかし鎌倉の實朝が、官爵を貪つて、一期の思ひ出にすると申したは、けしからぬ惡しき例しではございませんか。

と壁訴訟して、鶴ヶ岡の銀杏の下を持ち出した上に、

大御所樣は御子さまおびたゞしく（四十八人）、御官位は極上と申せば、福運もつきはしますまいか、こんなことを耳打しては、例の狂人と笑はれませうが、先生はいつも杞憂々々との仰せもございますから、そつと御聽きに達します。

と不吉な辻占を賣つた。

十一代目の大將軍には、公曉（くぎう）は現はれなかつても、それからあとは、德川の川も、次第に波だち、山陽自身が、自身の畫像に、

內の臺所は何うでも好い、國家の心配は、寢てもさめても忘られない。

と自贊して、それを門人の手に授け、これは今開くでない、まづ二十年たつてから出して見よとさゝやいた言葉を、妙なことを仰しやると思つてゐたが、弘化・嘉永の幕が明けば、早やそこには、大きな對外難が首をもたげてゐた。

またゝくうちに攘夷は表面、攘征夷大將軍の聲々が、大多數『外史』の愛讀者達から盛り上つて、それが、明治維新・皇政復古の曉鐘となり、幕府は目出たく大權を御奉還申上げた。

あはれ、賴山陽に天壽を全うせしめ、二十年・三十年、乃至百十餘年、今日の大御代に在らしめて、今の今、この世界の大變局を眺めさせ、『今外史・今政記』を、さらに〳〵『今

新策・今通議』を書いて欲しかつた。

山陽は、天命、幕末の旋風時代には遭はなかつたが、乃子三樹が代つて、その時局に立ち、雄々しくも國難に殉じて、乃父一代の精神を發揚したことは、千載青史の上に特筆さるべく、忠孝の神はここにやどつてゐる。

紀元二千六百一年立春　京都賀茂大橋のほとり望叡書樓にて

好尙生

賴山陽年譜

名襄（ノボル）・字子贇、後に子成・別號三十六峯外史・通稱久太郎（後にキウと訓む、中年一時「德太郎」）。

安永九年（紀元二四四〇年、西暦一七八〇年）庚子	十二月廿七日（陽曆、明年一月廿一日）、大坂江戸堀北一丁目の家に生まる。（父春水〇編太郎卅五歳、母梅颸〇靜子廿一歳。外祖父飯岡義齋六十三歳）	一歳
天明元年辛丑	閏五月一日、父の歸省に從ひ、安藝竹原へ向ひ、祖父又十郎（亨翁七十五歳）に對面、六月十五日歸る。〇十二月十七日、春水、廣島藩儒となる。	二歳
二年壬寅	六月廿一日、母及び在坂中の叔父杏坪〇廿七歳に從ひ、廣島着。	三歳
三年癸卯	二月一日、亨翁歿す、七十七歳。〇八月十六日、母に從ひ大坂に還る。	四歳
四年甲辰	大坂に在り。外祖母來島氏を喪ふ。	五歳

五年 巳乙	五月十二日、父母に從ひ、廣島に歸る。	六歳
六年 午丙	正月十四日より、杏坪に從學。	七歳
七年 未丁	九月十八日、始めて癇症を發す。	八歳
八年 申戊	正月十六日、藩學問所に入る。○七月廿五日、母に從ひ、大坂に入り八月廿七日歸る。○十月十四日、始めて藩の武術師範築山文左衛門に貫心流武術を受く。	九歳
寛政元年 酉己	六月十三日、妹十子（よう）—後に三穂—生まる。○十一月八日、義齋歿す、七十三歳。○この年頃、江戸版武者繪本を見て、英雄傳に興味を感じ、自から言ふ、修史の志これにより出づと。	十歳
二年 戌庚	八月一日、父拜領の新邸（杉ノ木小路○今紺屋町）に入る（今、百年祭記念山陽館）。○九月十六日、仲父春風の子熊吉（後に權二郎・景讓）、竹原の家に生まる。	十一歳
三年 亥辛	二月十三日、「襄」の名を命ぜらる。○「立志論」を作る。	十二歳

四年 子壬	北海外艦來の警報を聞き、詩を作つて所懷を述ぶ。	十三歳
五年 丑癸	春、立志の詩を作る。○六月四日、鹿兒島藩儒赤崎海門、江戸よりの歸途、柴野栗山よりの（通鑑綱目を讀むべしとの）訓言を傳ふ。（後に修史の本義、これより啓發せらると言ふ）。	十四歳
六年 寅甲	夏、宿疾保養のため、秋冬の交、再び竹原に在り。○七月廿六日、弟大二郎生まる、明後年夭す。	十五歳
七年 卯乙	古川古松軒より、地理の口授を聽く。	十六歳
八年 辰丙	七月廿六日、學問所の課程、『伊洛淵源錄』（宋學）修了。○十月廿六日、杏坪に伴はれ、石見有福溫泉へ、十一月十二日歸る。○ことし「古今總議」を作る、『日本外史』の序論、これより出づ。	十七歳
九年 巳丁	三月十二日、杏坪に從ひ、江戸へ向ひ、途中、兵庫の楠公碑を見て、「湊川」の詩を作り、四月十一日、本郷の聖堂學問所に入り、又尾藤二洲（外叔母梅月の夫）、服部栗齋（杏坪の師）の教を受く。○冬、野史を讀む詩を作り、武家時代の史實を詠ず。	十八歳

十年 戊午	四月四日、江戸を發し、五月十三日歸藩。○十月一日、次弟士郎生まれ、六日夭死。○「樂府、蒙古來」を作る。	十九歳
十一年 己未	二月廿二日、藩醫御園道英の女淳子（十五歳）を娶る。○十月、藩用人築山嘉平主宰の輔仁會に入る。	二十歳
十二年 庚申	九月五日、京坂へ向ひ脫藩、十一月三日、歸邸幽屏せられ、「憐二」と假稱。	廿一歳
享和元年 辛酉	二月廿日、長男都具雄（トクヲ）（後に餘一・聿庵）生まる。○十一月十六日、修史と經世策を計畫す。	廿二歳
二年 壬戌	十二月十日、『外史』の一部成稿。	廿三歳
三年 癸亥	十二月、幽屏を解かる。	廿四歳
文化元年 甲子	正月十五日、廢嫡、從弟景讓、代つて父の家督相續者となる。○『新策』成稿、『外史』また進捗す。○少年作『山陽文稿』を編す。	廿五歳

二年 乙丑	五月九日、謹慎を解かる。○八月廿六日、保養のため、父に從ひ竹原へ赴く、菅茶山來會、九月廿五日歸る。○『小文規則』成る。	廿六歳
三年 丙寅	『外史』「豐臣氏」まで、大略脫稿。	廿七歳
四年 丁卯	春、「德川氏」に入り、やがて全部成る。○蝦夷（エゾ）地魯艦來の警報につき、公文書を手寫し、又その意見を茶山に致す。○九月廿二日、春水、杏坪に伴はれ、竹原行、十月三日歸る。○平安京以降、現代に至る「詠史」十二首を作る。	廿八歳
五年 戊辰	二月、『評點孟子』成稿。○四月廿日、妹三穗子、藩士進藤吉之助に嫁す。	廿九歳
六年 己巳	十二月廿七日、家を去り、備後神邊・茶山の家に寓し、「廉塾」にて代講す。	三十歳
七年 庚午	七月廿六日、入京の宿志を遂ぐべく、築山嘉平へ、その斡旋を乞ふ長翰を致す。○十一月、茶山に對し頻々その意旨を陳ず。	卅一歳
八年 辛未	閏二月六日、廉塾を去る。○十五日、大坂に入り、篠崎三島・小竹父子に依り、京都小石元瑞の周旋にて、入京の志を遂げ、新町丸太町に開塾。○一時藩邸の指目を受け、下坂、五月廿三日、再入京。○秋、『外史』の論贊に着手す。	卅二歳

九年 壬申	正月、車屋町御池に轉居。○春、浦上春琴同伴、淡路遊歴。○秋、姫路、同上。	卅三歳
十年 癸酉	三月廿六日、春水、聿庵を拉へ、有馬温泉より京坂に入る。大坂にて對面の上、京都、宇治に從遊、四月廿三日、西ノ宮に見送る。○十月九日、春琴、及び宮脇有景同伴、濃・尾・遠・勢方面へ遊歴、十二月歸京。	卅四歳
十一年 甲戌	八月十日、歸省の途に上り、廿三日、廣島着。歸途、鞆津にて、文化八年、始めて會見せし田能村竹田と邂逅、十二月二日歸京。	卅五歳
十二年 乙亥	四月、歸省。讃岐を經て歸京。○昨年來入家の京都大崎嘉兵衛（械屋）の養女りゑ子（十八歳）を娶る（淳子は享和年中實家へ引取る）。○六月、二條高倉へ轉居。	卅六歳
十三年 丙子	二月十九日、父危篤につき出立（この日、春水歿す、七十一歳）。廿四日、歸着。「春水行狀」を作る。四月、歸京。	卅七歳
十四年 丁丑	『外史』の論贊略成る。	卅八歳

文政元年 戊寅	正月、春水三年祭につき出立、二月五日歸着。○三月六日、京都より隨行の門人後藤松陰を拉へ九州へ向ふ。博多に亀井昭陽を訪ひ、五月廿三日、長崎に到着（松陰歸東）。八月廿三日、更に鹿兒島へ向ひ、熊本滯在、辛島鹽井を訪ひ、廿九日到着。十月六日、熊本に還り、廿三日、豐後岡に田能村竹田を訪ひ、又隈町に入り、日田の廣瀨淡窓を訪ひ、その間又熊本へ引返し、十一月廿五日、隈町に還り、耶馬溪を經て、古城に末弘雲華を訪ひ、再び耶馬溪に遊び、十二月十六日、中津を經て、下ノ關に越年。	卅九歳
二年 己卯	二月四日、廣島に還り、廿三日、母（六十歳）を奉じて歸京、二條木屋町に假寓。三月廿四日、嵐山。四月四日、吉野山へ向ひ、大和巡りの上、大坂を經て歸京。○閏四月、また大津、宇治に同遊。○廿日、廣島へ還り、八月十四日、歸京。	四十歳
三年 庚辰	正月廿日、聿庵、藩士戸田勝馬妹國子を娶り、やがて離縁。○六月下坂。○十月七日、辰藏生まる。	四十一歳
四年 辛巳	四月廿六日、兩替町押小路へ轉居。○八月、下坂。○八月八日、聿庵再び寺川茂司馬妹皐子を娶る。	四十二歳

五年 壬午	○十月十四日、修正中の「春水遺稿」原本を廣島へ送る。○十一月九日、東三本木丸太橋（水西莊）へ轉居、山紫水明處を庭中に築く。	四十三歳
六年 癸未	二月十八日、『增評八大家文』成る。○八月、下坂。○十一月七日、又藏（後に又二郎・支峯）生まる。○友人石井豐洲の『佩書』評本・『謝選拾遺』その他、前後整稿。	四十四歳
七年 甲申	正月十六日、入京中の田能村竹田が歸鄉を大坂に送り、廿一日歸京。○二月廿六日、「古文典刑」の淨寫を、門人村瀨藤城に託す。○三月六日、下坂。母の東上を迎へ、嵐山を經て歸京。○その間、下坂。四月に入り、大津・宇治、高雄遊覽。○十月七日、廣島へ還り、十二月廿八日、歸京。	四十五歳
八年 乙酉	三月廿八日、辰藏夭死、綾小路光林寺に葬る。○四月、和歌浦遊覽、野呂介石を訪ふ。○五月廿六日、三木八郎（後に三木三郎・三樹一鴨厓）生まる。○八月、姫路藩家老河合隼之助（寸翁）に迎へられ、書を仁壽山學問所に講ず。○次いで歸省、十月廿九日歸京。	四十六歳
九年 丙戌	春、江戸の市河米庵（○文化元年、廣島にて初會見）・津藩の齋藤拙堂及び九州歸りの梁川星巖・紅蘭夫妻等來訪。○年來修正中の『外史』新稿本、略成る。	四十七歳

十年 丁亥	三月一日、梅颸（○六十八歳）、杏坪（○七十二歳）大坂着、下坂出迎へ、五日、歸京。十五日、嵐山。廿日、吉野山二泊。奈良、宇治を經て、廿八日、北野・平野。四月十一日、大津二泊歸京。○廿六日、日野權大納言資愛卿に、杏坪、雲華と共に招かる。○廿九日、高雄、槎峨二泊。○五月三日、三本木清輝樓留別宴。○八日、三條柏葉亭送別會。○十日、有馬溫泉。十一日、別れて歸京。○一行廿二日廣島着、「十旬花月帖」成る。○廿一日、桑名藩松平前老中定信侯の求めに由り、『外史』を呈す。○閏六月、下坂、小竹及び大鹽中齋を訪ひ、廿日歸京。○廿九日、母へ定信侯よりの謝答を報ず。江戸大窪詩佛來訪。○八月十二日、茶山病氣の爲め西下（十三日、歿後）神邊着。○九月九日、仁壽山開講。十八日發、歸京。○連年、『春秋・書經・易經』の研究。（天保三年夏、春秋講義錄成る）。	四十八歳
十一年 戊子	正月、桓武天皇山陵を拜す。○廿五日、定信侯『外史』の題辭成る。○二月廿六日、『春水遺稿』開版。○十二月、『日本樂府』成稿。	四十九歳
	二月十四日、杏坪を備後三次の郡奉行所に訪ひ、十八日歸省。○廿七日、坂井虎山來見。○三月七日、母（○七十歳）を奉じて出立。○十九日、嵐	

十二年 己丑	山を經て歸京。伊勢へ向ひ、皇大神宮を拜し、宇治を經て大坂着、小竹及び岡田半江同伴、岸和田行、大坂を經て、廿七日歸京。○五月六日、大津行。○八日、日野卿來臨。○廿四日、江戸・鹽谷宕陰來見。○八月十四日、大津行、湖上觀月二泊。○九月六日、津・齋藤拙堂來見。○十月廿一日、母歸國下坂、箕面觀楓、十一月二日、尾道にて別れ、竹原を經て、廿九日歸京。○十二月廿四日、竹田來宿。○この月、姫路藩へ『外史』納本。	五十歳
天保元年 庚寅	正月、『日本政記』大半成稿・『通議』整稿。○三月、鹽谷宕陰入塾、九月去る。○閏三月七日、古賀穀堂來訪。○五月十八日、松平定信侯を祭る(一周年)。○六月七日出立、廿二日歸省、八月六日歸京。○九月、大鹽中齋の囑に由り、大坂西町奉行新見伊賀守正路へ『外史』を贈る。○この際『通議』を河合隼之助、彦根藩家老小野田小一郎其の他へ贈る。○十一月一日、女陽子生まる。○十二月廿日、竹田來宿。	五十一歳
二年 辛卯	二月廿三日、春琴、元瑞、及び江戸細川林谷と月瀨觀梅、廿五日歸京。○三月十二日、竹田と嵐山へ。○四月十四日、聿庵、江戸邸へ向ふ途中入京、十五日、瀨田に送る。○竹田の「赤復一樂帖」の跋を作り、自家に收む。○十月二日歸省、十五日、母を奉じて宮島行、仁壽山開講の後、十二月五日歸京。	五十二歳

三年 壬辰	正月、江戸に入りて東北地方遊覽の志あり、果さず。○三月廿四日、穀堂、江戸より來訪、嵐山に遊ぶ。○下坂、小竹、中齋を訪ひ、四月廿三日歸京。○五月八日、彦根へ向ひ、城中にて開講、星巖と湖上泛舟、廿日歸京。○六月十二日、喀血。○廿一日、猪飼敬所來問。○廿三日、『書後・題跋』の整理を、門人兒玉旗山に託す。○この際、支峯○十、三樹○八を門人牧百峯、及び旗山の塾に託す。○七月廿五日、八歳月十八日、また喀血。○九月十四日、星巖、江戸行來別。小竹來問。○この際、『山陽詩鈔』整理成る。『政記』の餘稿を、塾頭關藤藤陰、及び牧百峯に託し、又詩文稿を修正、『政記』の南北朝續論、及び『政記』内廷論を補成して、跋を作り、廿三日、夜に入りて歿す。○廿五日、東山長樂寺に葬らる。	五十三歳

明治十四年三月廿一日、五十年祭祭粢料金百圓御下賜。
明治廿四年十二月十七日、贈正四位。
昭和六年五月十六日、百年祭祭粢料金參百圓御下賜。
昭和六年九月廿三日、贈從三位御追陞。

昭和十六年八月二十日印刷
昭和十六年八月廿五日發行

定價壹圓 郵送料拾錢

〔外地定價壹圓拾錢〕

賴山陽

著作者 木崎好尙
東京市牛込區矢來町七十一番地

發行兼印刷者 佐藤義亮
東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社
會員登錄番號 一一二〇八七
電話牛込 (長)八〇五番 八〇六番 八〇七番 八〇八番 八〇九番
振替東京八〇八番
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

東京市小石川區西江戸川町 富士印刷株式會社印刷

XZ1M-23

新傳記叢書目次

格規判上製美本
定價一册一圓

ペスタロッチ……田中寛一
ミケランジェロ……板垣鷹穂
ツエッペリン……隈部一雄
バスツール……林髞
アムンゼン……山本一清
賴山陽……木崎好尚
杉浦重剛……猪狩史山
——以上既刊——
福澤諭吉……富田正文
本居宣長……久松潛一
小村壽太郎……信夫淳平

徳川光圀……高須芳次郎
上杉謙信……木村毅
ベートーヴェン……河上徹太郎
キュリー夫人……嵯峨根遼吉
エヂソン……辻二郎
ガリレー……石原純
グーテ……高橋健二
シヨパン……長谷川千秋
リヴィングストン……阿部知二
——以上續刊——

M-23

新潮社版

終